女鑑
明治三十三年八月廿日發兌
第貳百拾壹號
國光社

女鑑第貳百拾壹號

目錄

孝子その女



避暑旅行に就きて

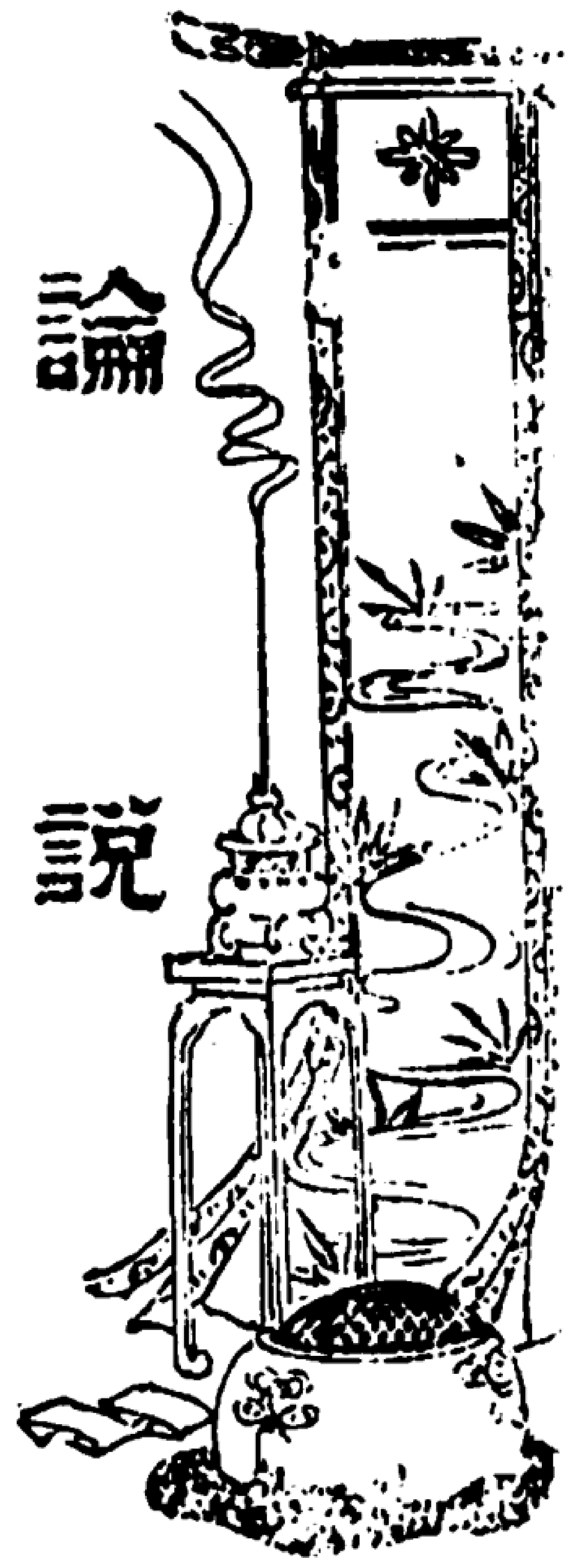
今や、大方の紳士令嬢は、避暑旅行と稱して都門をはなれ、各自が適かむと欲する地に居らるゝことならむ。

古くより言ひならしたる、燬くが如き炎熱は、青々としけれる草木をも萎靡らせ、かしがましく鳴き噪ける鳥蟬をさへ、いと物憂げに、ねをのみなかしむる頃に至りて、强ひて炎熱と戰ひ、紅塵の中に呻吟するが如きは、決して、衛生上宜しきを得たるものといふべからず。或は老長にかしづき、或は最愛しき人々を携へ、水明山紫の間に遊び、宇宙の眞美を友とし以つて、浩然の氣を養はむことは、ひとり、都人士のみならず、邊僻の地に淸臥せらるゝ人といへども、猶、甚、必要にして、有益なるを信ずるなり。

維新以來、文物の進步に伴ひ、人の心、巧智にのみ趨り、且は、競爭の念熾なる

より、人と家との隆替榮枯は、昔日の如く緩悠ならず、今日紳士と稱する人も、たちまちにして、落魄不遇を嘆ずるの人となることある、代に、昨日の貧生も明日は富豪となるもの尠からず。故に中流以上に斑する人といへども禮節に嫺はず、徒に豪奢を競ひ放縱を極めて、風紀を壞亂し、徳義を腐敗せしめて恥ぢざるもの多し。是を以つて、細大凡百の事業、其の名の美なるにも似ず、不潔の添はざるもの、甚、稀なり。避暑旅行と稱するものも、即ち、其の一たるを免れず。或者は、家族の環視を避けて、不潔なる歡樂を恣にせむがために、或者は、社會の監視を遁れて罪惡を遂行せむがために、或者は、唯、或山、或海に居らざれば、紳士の義務を果さゞるものと思ひて、避暑旅行と稱するものを行ふなり。心ある者、誰か、斯る理由の下に、この旅行を慫慂せむや。

わが讀者諸媛に望むところは、山河を跋渉せむもよし、山水明眉の地に歩をとゞむるもよし、要は、炎熱を避けて、身体の健全を圖り、天地の自然を樂みて、精神を高尚清潔にし、心情を興起感憤せしめ、以つて、秋來り冬到るの日のために自重せられむことなり。世の所謂避暑旅行の如きは、諸媛のために之をいふを厭ふなり。



論説

理想の婦人（上）

三輪田　眞佐子

天下の女子擧りて、文を讀み、學をつとむる所以のものは、果して如何なる目的を遂げんためなるか。亦、公に、私に學校を設け、女子を敎育するものは、元來如何なる主旨に基くものなるか。今、單に、そは、女道を學び、女道を敎ふるといはゞ、一言にて盡すを得るといへども、更に、その女道なるもの丶、內容を分析して、比較硏究せんか。甲の唱ふるところと、乙の導くところに、雲泥の差あるは掩ふべからざるなり。

凡そ、彼此の女道とするところは、彼此の見識によりて、差別を生ず。今近く例を取らば、貝原益軒翁の女大學は、福澤諭吉翁の女大學とは、氷炭相容れざるところあるは、讀者の知るところならん。古人曰く、共にわれを聖なりといふ。誰か烏の雌雄を知らん。おのれ、亦烏の雌雄を知らざる黨を免れず。されども別に愚見なきにあらず、他日、こを述ぶるよしもがな。

兎に角、今日は、萬人の是認する女道を指示して、靑年女子の行路を誤るなからしむるは、先進者の任務にして、且つ、これによりて、女子敎育の方針を定めざるべからず。詩に柯をとり柯をとる、その法遠からずと。女生の天性に基きて、自然の女道は存すべきものを、世の先進者は、專ら各自の精しきところに偏して、輕忽にも、女道を揚言して、無垢なる乙女子をして、生涯、中正の道に

進むこと能はざらしむるこそ、返す〳〵も忌はしき極ならめ。

甚しきは、學術技藝と、教育の本旨なる人道とを相混ずるものなきにあらず。そも〳〵萬般の學術技藝は、これを絶對的に離し見れば、さまで價値あるものにあらず。唯人道を明にせんため倫理を講し、歷史を讀み、人道を補益せんため、理化學、及び、動植學を研究し、亦人道の一部分として、美術を樂み、遊戲を事としてこそ、學術技藝の尊き次第なれ。故に苟くも人道に戻る研究なれば、これを、學と稱すべからず。亦一毫たりとも、人道を破るものば、如何なる遊樂も嚴禁すべきなり。

然るに、往々讀書家は、女生に讀書を授くるを以て、教育の能事盡きたりとなし、數學家は、女生の數理だに能く悟る以上は、以て、教育の目的達すると思ふめり。その、他、音樂に、美術に、教ふるもの、技藝に堪能たる學生を見て、全然教育の効成るものとする觀あり。これ方便を以て、終局の目的とする誤解ならん。蓋し、教育の目的は、人道を知らしむるに外ならず。

勿論女子教育は、女生たる天然の性能を圓滿に開發せしむるを以て、目的とするといふも可なり。即ち、圓滿なる性能の女子は、人道を知るに必要なれなり。從ひて、體育も、肝要なり、德育は、主要なり。智育も必要なり。その他美育も欠くべからずといへども、その相互の調和を得て始めて、天眞爛熳たる女子を作るを得るなり。若し智育のみに偏せんか、哲婦城を傾くに至るべし。德育のみを尊びて、その他を顧みざるときは、女事を果すこと能はざるべし。これと同時に、體育を怠らんか、智も用をなさず、德も光を失ふべし。さり

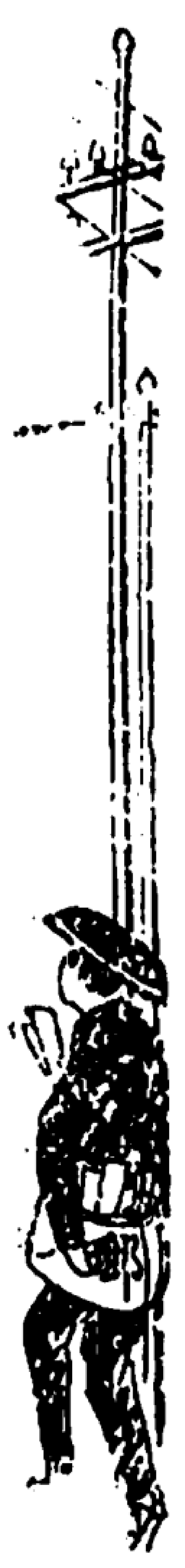
とて、情育なきものは、優美の分子を失ふに至らん。

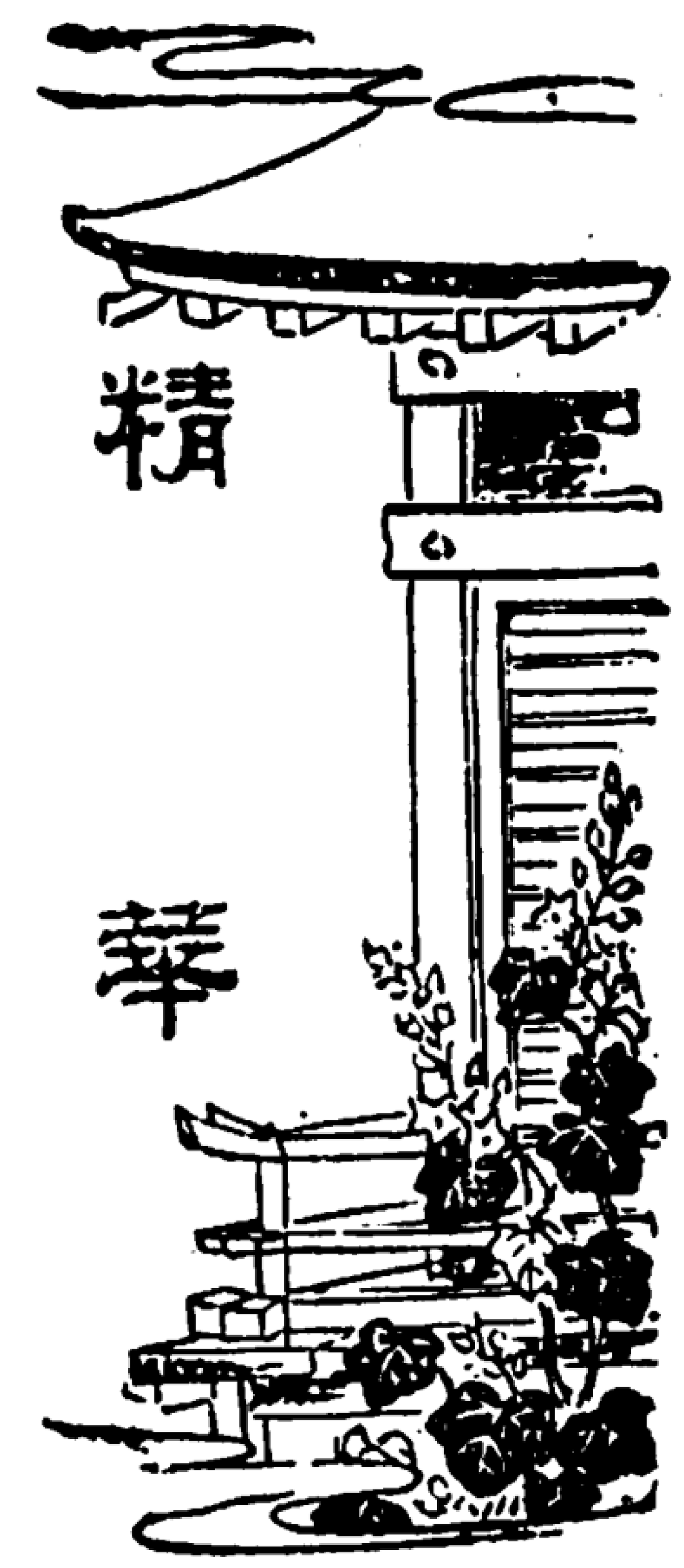
女子と國民養成

岸田松二郎

翹然として天を摩するの喬木も、蔚蘙にして、之を折れば、一擧手の勞に過ぎず、嶄然として、群衆を拔くの俊傑も、垂髫にして、之を壯はゞ、一投足の煩に出でず。鬼を挫き、神を恐れしむるの豪傑も、纎手蒲柳の懷に育す。されど、賦性卓犖たるも、將た天資强剛なるも、嫩葉の鞠育、其の宜しきを失はゞ、則ち、剛を化して、弱となし、俊を移して、鈍に化す。其の機全然婦人の手にあり。賴山陽は、天下の英傑なり。幼時一日庭中に在り。天を仰いで怪訝に堪へず、卒然、母に問うて曰く、天は如何なる者ぞ。母答て曰く、旋轉休まざる、彼が如しと。山陽喟然として啼泣、半時を過ぐと。蘇東坡は、東洋の文豪なり。其の幼なるや。母、常に老蘇の文を暗記せしむと。蓋、三者の幼兒に於ける如斯なに視れば、如何に英邁俗秀の士と雖も、幼時の嚮導如何に存すること知者を待たずして瞭かなり。兒童の天性として、事々物々問を試むるに當り、之を指示するものは、婦人なり。是を觸るものは、母の力なり。而して、彼等の疑は、多種多方にして、最も深く記臆に存す。されば、之が母たるものは、智識富膽にして、且之を解示するの巧ならざるべからず。彼等柔嫩なる腦底に忠君愛國の念を以てし、之を啓くに天賦の順序を以てせば、其の効果果して如何ぞや。佛國の獨逸に於ける徹骨の仇怨あり。國民擧て、之に報んことを務めて、男女の差なし。故に小學讀本中

に、彼の二洲、割譲の事を記載せり。或僻邑の婦人の其の兒の膝下に復習し、讀んで、此に至るに當り、慨然として、洗雪の事を語れりと。嗚呼之を聽きたる幼兒の心中、果して、幾多の感慨をか充せる。蓋し佛國々民翕然として、國家民人に存すること如斯。宜なり。頻年彼國勢隆々として揚り、獨逸をして背後荊蕀の思あらしむるに至ること、眼を轉じて、我が邦に及ばんか。彼の遼東還附の大詔渙發せられたりし當時、吾人同胞は如何に之を感慨せしが、噴々呶々として、口に筆に、臥薪嘗膽を絶叫したり。然るに、時を經ること未だ數年を出でず。吾人、既に、之を遺忘したるか眼に映ずる太平の光景婦人、之を描出して明なり。勤儉の聲は、到所人々、之を唱ふれども、其の實歩は、正に年々逆流せり。國家は多事と稱し、國民は、負擔を重しと云ふと雖も、花月を賞し、舞雩に風ずるの狀は、歲月と共に盛なり。流行に追隨し、絹絁を重しとずるの風は、年と共に成れり。嗚呼曩きに、吾人を鼓動したりし觀念は、今將た何に、之を索めむ。嗚呼婦人の國家に於ける、彼の佛國の婦人の國家に於けるが如き事あるか。嗚呼三尺の兒をして、確然たる忠君愛國の念慮を扶植する所以のものは、溫然たる慈母の訓諭に萌へ、鐵石猶堅しとせざる男兒の勇は渾然たる家母の鞠養に成れり。異日、奉公の事あるに當り、肝膽を挫きて、君國に捧げ、孟化の勇も、一擊の下に粉韲すべき國民を出すは、皆、是婦人膝下訓育鞠養の力ならざるなし。豈に國民養成の上に於ける力偉大ならずと云はんや。





公益

人の、學を修め、業を習ひて、智能を啓發し、德器を成就するは、獨り、其の身を善くするのみならず、其の得たる所を以て、廣く、世を益し、衆を利し、天下衆人と、其の幸福を分ち、歡樂を共にせんとするが爲なり。

源内、夙に、公益を圖り、大に、天下を利せんとする志深かりき。而して、弱年の身を以て、藩を辭して、長崎に出でたり。蓋、平時にありて、國家に、大功を立てんは、長崎に出で丶、外邦の人と交際し、其の事情を明にするに若かずと思ひしなるべし、長崎は、當時の開港場なりしなり。時に、清商、贋僞の藥品を輸入して、邦人を欺瞞するを憤り、譯官と共に、賣買の席に赴き、眞僞を判定して、贋物を還し、清商をして、其の、本草學に精しきに感ぜしめ、爾來、僞物を輸入せざらしむるに至れり。本草學とは、古の藥物學なり。古の藥は、草を本とすれば、かくなづく。而して、動物、鑛物、之に附せり。是、即、其の學問を應用して、我が國藥商の爲に、其の損失を防げるなり。

源内、又、和蘭譯官に就きて、蘭語を學べり。又、時々、彼の國の珍器を求め、工夫を凝して模造せり、是、亦、大に、國利を興さんとせしなり。其の、發電器を摸造し、且、是を以て、病を療する方を發明せしに至りては、叡智眞に驚くに堪へたり。又、石綿を以て、火浣布を製す。火浣布は、

火に投じて燃えざる布なり。此の物、未、世の用をなすに至らざりしかども、萬國未曾有の物を製し、智功に誇れる西洋人をして驚歎せしむるに至れり。

源内、大阪に出でゝ、豪商と交る。是、亦、國利をはからんとせしなり。當時、我が國の砂糖は、甘味薄く、色白からず、支那製に比すれば、品位、甚下れりしかば、中島屋喜四郎に勸めて、備後の地に、甘蔗を栽えしめ、其の養方を教へ、製糖の法を改めしめて、精良の製品を得、大利を得しめたり。是、獨、喜四郎を利したるのみならず、實に、國家の産業を發達せしめたるなり。

源内の如きは、よく、其の學問智能を應用して、社會公衆の利を圖りたるものなり。且、其の外人と交り、彼の長を採りて、我を利せんとしたるが如き、當時にありては、着眼、實に卓絶せりといふべし。世未進まず、身、不遇にして終りたれども、其の功業は、永く、天下を幸し、其の名、後世に嘖々たり。

古歌に曰はく、

行末のさかえ願はゞ人のため
善からんことの數をつみてよ

歌の意聞えたるが如し。衆人の爲に、多く、善事を行ひ、廣く、天下を利せば、幸福、自、其の身に及び、其の身に及ばざれば、子孫に報い、其の名は、必、後昆に垂れん。此の歌、上の句に、行末の榮願はゞとあり。然れども、人は、其の身の幸福を希ふを目的として、公益を圖るべきにあらず。されば、この句は、たゞ、其の自然の應報を得んことを示せるものと見るべきなり。

渥美某の妻

山本正周

渥美某の妻は、永井某の女にして、年十五なりける時に、渥美の家に嫁ぎけるが、天性貞靜にして、言葉寡く、我が實家は、富祐にして、夫の家は、貧しけれども、之を憂しとも思はず、能く夫に事へて、恭敬心を失はず、夫婦の中いと睦じく、一人の子をさへ設けたり。しかるに、後十年を經て、夫はみまかり、年なほ若ければ、改めて、他へ再嫁すべしと、其の兄なる人の勸めけれども、妻は節を守りて、其の言に從はずされど、兄は強て、しかされよとて迫りければ、妻は辭するに道なく、一間の中に入りて、自害せんとしけり。之を見付たる姆は、大に驚き、聲を揚げて呼びければ、兄も何事ならんと、急ぎ行き見れば、かくの次第なりけるにぞ、あはてゝ、之を押し止め遂に妹の意にまかして、離縁の事は思ひ止まりける。是より、妻は、亡き夫の靈を祭り、また子の成長を樂しみに、月日を送り、夫の墓に詣づる外には、家を出づることなく、貞操正しく日を送りけるが、子十四歳になりける時、己は、はかなくも死しけるが、其の子は、母の教訓によりて、成人の後には、あつはれ名を揚げけるとぞ。

孝子その女

吉野眞澄

人皆は、鹽燒く浦の蜑小女と聞かば、はしたなきものとのみ思ふらむ。おほかたは、色あくまでくろく、人けもなう、男女のけぢめも知れざれば、心もさながら、鬼の樣ならむなどおし量りなむ。

しかれども、姿容は、さもこそあらめ。心は、なかなかにやさしきものゝありて、時には、玉の高臺にいつかるゝ都人も及ばぬものもあんなる。いでこゝに、かゝぐる孝女が行をみられよ。

孝女が名は、そめと呼びて、日向國、那珂郡、下方村の生れなり、家業は、鹽たくわざのしはからくも、世をわたりけり。そめ子は、二つばかりのころ、父、におくれて、只、母そばの繁きおもひはのかげに育てられたり、家には、なほ、老いたる祖母と、愚痴なる伯母とあれど、男とては、有らざりければ、いよ／＼貧しうなり行くのみなり。かてゝ加へて、そめ子が、五ッばかりになりぬるころ、火災にさへかゝりて、家はもとより什品などまでのこるものなく、焼けうせにけり。されば、今は、すみかもなく、鹽焚く小屋のかたすみに、竹床をかまへて、いぶせきなからも、わづかに雨風を凌ぎけり。さてあるほどに、母また、眼病にかゝれり。

とかくするほどに、貧しさは、いよゝせまりて、おぎはひも、いと、おぼつかなくなりぬ。こゝに、そめ女、をさなごゝろにも、かくては果てじと、おろかなる伯母をはげまして。これと力をあはせ、朝夕、力のかぎり立ちはたらく、されど、僅に、一ッの鹽ふくろをよわかたにとり擔ひて、里わの知り人の家に鬻ぎて、米麥さては、芋、南瓜などのたくひに換へて、細くも煙を立つるにすぎず。かかるほどに、伯母はみうせて、母が病はます／＼、重くなりぬ。そめ女が心は、いかなりけん。みまかれる者は、如何とも、かへさんすべなし。今は、只、母が病の一と日もとくと、おこたれかしと案じわづらふほどに、同じ郡の福岡といへる所に、良き醫師のありと聞きければ、如何にもし

て、其の治を請はんものと、おもへどもかなしや、家には、一錢のたくはへもなし。されど只、朝夕口にするのみなりしに、遂に、近隣の人とはかり、そくばくの代を借り得て、はゝどを、福島なる醫師がもとにつれゆきぬ。時に、そめ女は、年わづかに、十二なりきとす。

おほかたの人なりせば、年、十二と云へば、今、やう／＼、西と東のけじめを知りえたるばかりにて、いかで、家計の事などにおもひ及ぶべき。ただ、父母の膝下をはなれず、たはむるゝのみならむ。その、女、なほ、さきに、借りたる錢をかへさむものと、鹽の賣り代を少しづゝたくはへおき、年をもへずして、償へて。さるほどに、祖母は、いとゞ老耄し、母はつひに、明を失ひしかど、晝は、兩母介抱の暇に、みづから、薪を伐りて、鹽をやき、曉に星を戴きては、之を鬻ぎ、たゆむ事なく、倦ぬ事なく、折々は、兩母が好むものを、かひて、進むる事を得るに至りぬ。

春霞たち、秋風ふくと思ふまに、そめ女は、はや、十四五歲にもなりぬ。姿色も、人なみならず、いと、うるはしかりしかども、孝子がまごゝろに恥ぢて、誰とて、たはむるゝものもなかりしとかや。かゝるうるはしき行は、誰云ふとなく、次第に、遠近に聞えわたりて、知らぬ人もなきまでになりぬ。かくてあるほどに、もとの飫肥藩の知事、郡をめぐりて、はしなくも、そめ女が行狀を聞きて、感歎して、おかず、遂に、米五斗をたまひて、之を施表せり。

その後、いよ／＼、孝養をつくしけるに、祖母も、みうせ、母は、なほも、帶下などうれひて、日々の食物もまゝならず、其の病、追々崩漏になりて、遂にはかなくなりにけり。そめ女、その死屍の側

に、慟哭して、聲を失ひ、轉倒せんすべをしらず。見るもの、袖をうるほさぬはなかりけり。かく、わづかゞ間に、二母を失ひ、大に、困窮したりしかども、近隣の人の助によりて、かたの如く、喪祭の式をば終へたりき。かく、一日も、身を安んせず、窮苦の内に育ちながら、心ばへいとすなほなりけり、或人、そめ女が孝行を聞き傳へとぶらひゆきて、いひけるは「汝少くて、父を喪ひ、祖母と、母とに仕へ、十餘年をへて、今日に至れりとか。その間、何事が最、困苦なりしぞ」と問ひけるに、そめ女、涙を拂ひつゝ、妾、貧しき家に生れたれば、困苦は、元よりの分なり。たとひ、三日食ずとも、困苦とは、思はず、一錢なくとも、困苦とはおもはず、暑きに、日掩ふこと能はず、寒きに衣きる事あたはずとも、また、困苦とするにたらず。しかれども、只、一の、困苦にたへざることはべりき。そは、母の世にありしころ、常に、妾にかたりて、家、火災にかゝりしより、此の矮屋におきふしするがいとわびし。はやく、新宅を營みて、うつりすまばやといひはれき。しかれども、もとより、朝夕の烟をだにたてかぬる身なれば、遂に、この望を、えはたさぬに、はかなくも、みまかられたり。今も、これを思ひ出で侍れば、食も甘からず。居も安からず。これぞ、妾が、一生の困苦なるとこたへしに、其の人、ふかく、其の志を憐みて、米一俵をおくれるを、そめ女固く辭みて、うけず。其の人しひて、御母の靈前に供せよといへりしかば、そめ女、涙をながしてうけたりといふ。時に、そめ女は、年、二十ばかりにて、容儀卑しからず、言語も、ひなびたらず。されば、里人、ふかくこれを敬ひたりけりとぞ。



家政

女禮

婚禮式（一）

有住常子

東宮殿下の、上もなき御慶事の御祝を、鄙も都も、おしなへて、伺ひ奉りしより、此の國の婚禮式の事の、世上に流行し來りぬ。この御式のおもくなすべき事は、誰も彼も、志したることなれど、其の次第を記したる書も無かりしによて、先古き人の、類聚婚禮式を著して、今の世の婚禮式の事をものする人のためになしゝより、大方は、此の書によりて、貴き御あたりの、御式もと云ふ人さへ有れど、さるよき書にも有らずなん。されど、委敷、此の式の事をたづねんとせらるゝ方々は、開きたまふべき書なるべし。今度には、其の書の内よりも、又は、其の書にも云ひたらぬ方をもそへて、一通りのついでを記しはべらん。

仲人

先、仲人をたて、嫁女の方の樣を、よくはからひ、聟方の事も、能く知らせて、殘る所無ふ、打ち明して、扨、結納の禮代を送り合ふべし。

夫より、仲人は、双方の事をつゝみかくし事無く、かたりつけて、双方の親類書より、結納の贈答にも注意して、婚禮式前方の次第をよく、計ふべし。

仲人は、殊に双方の、年齡しなかたち等を、能能双方に通じて、古令には、男年十五、女年十三以上、外國の定めに、男年二十、女年、二十とい

ひ、又、十六にしてめとり、十四にしてよめ入すといひ、又、今のみさだなる民法に、男子は十七才、女子は、十五才といはれたるなど、考へ合せて、今のみさだになるべきはさらなり、其の以上からして、男三十、女二十になどいへるを取て、双方のほどをたがへざる様になすべし。是より前に見合の事有るべし。是も媒妁人のあづかりて、行はすべき事なり。

結納

先結納は、たのみの事なり。ゆひいれともいひ來れり。字になづむべからず。夫と頼み、つまと頼むの禮代を取りかはす式を云ふなり。此の式を総れば、夫婦のなからひとなるなり。されば、おもきことゝ知るべし。

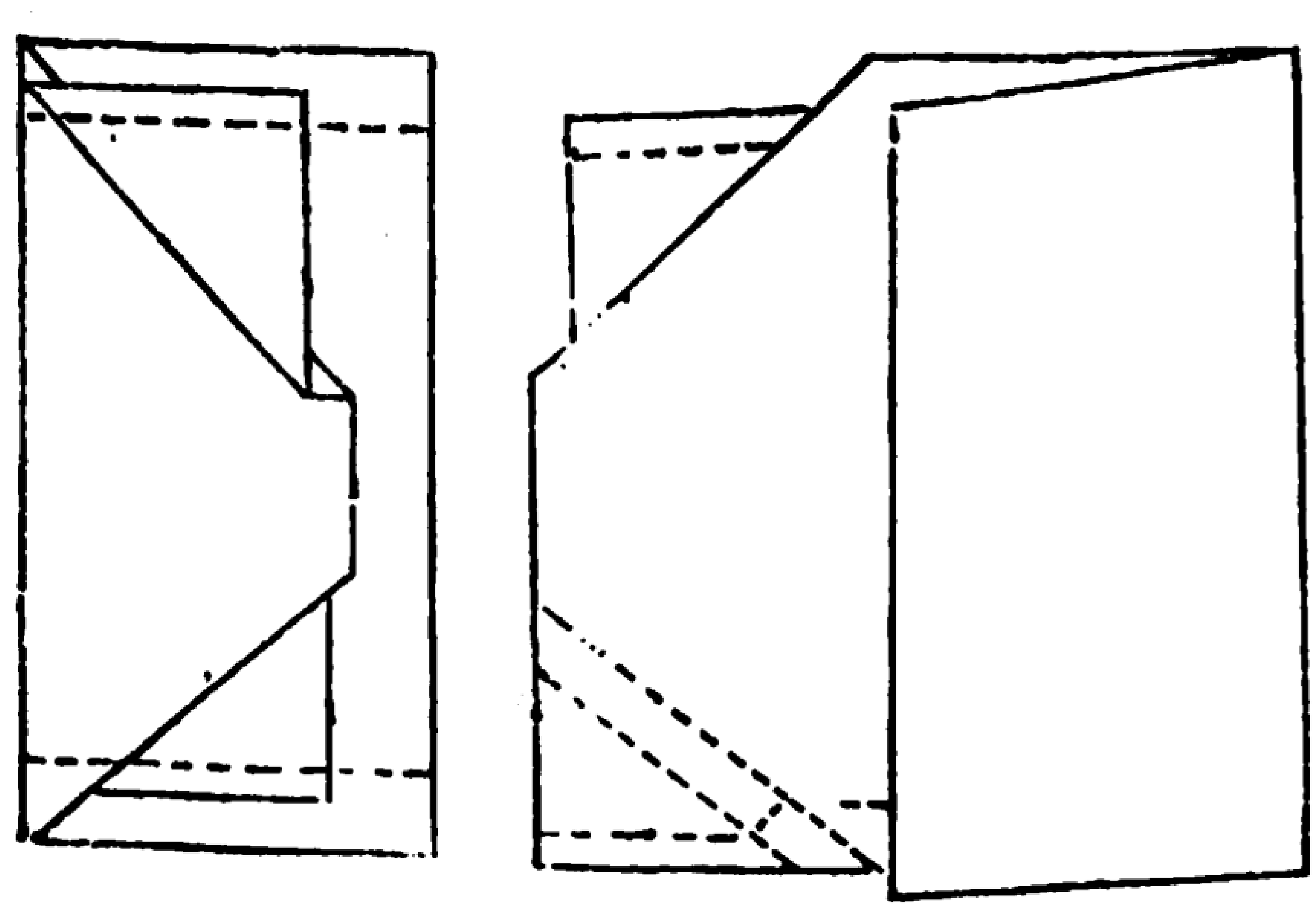


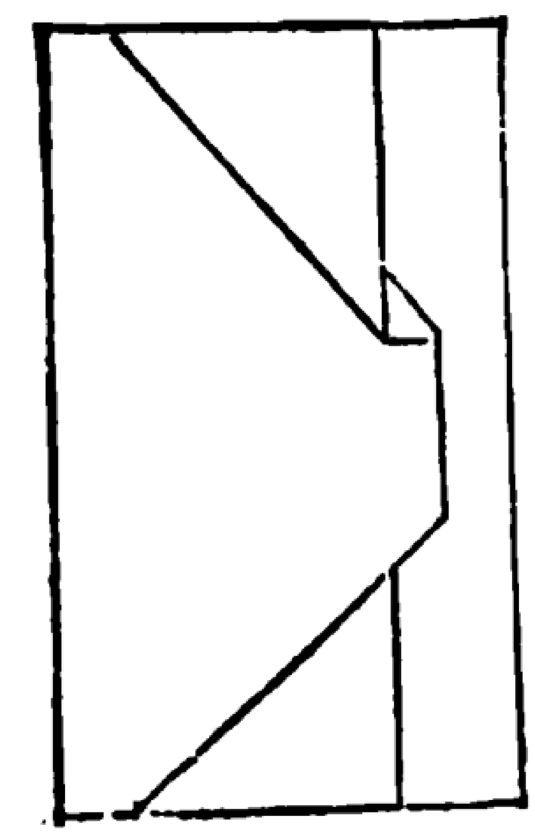
折方

たゝう紙包

有住くわう子

つかひかた、前號のと同じ、水引も、かくる事




（折り上り）

茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵碌仙齋不羨
關　葦雄

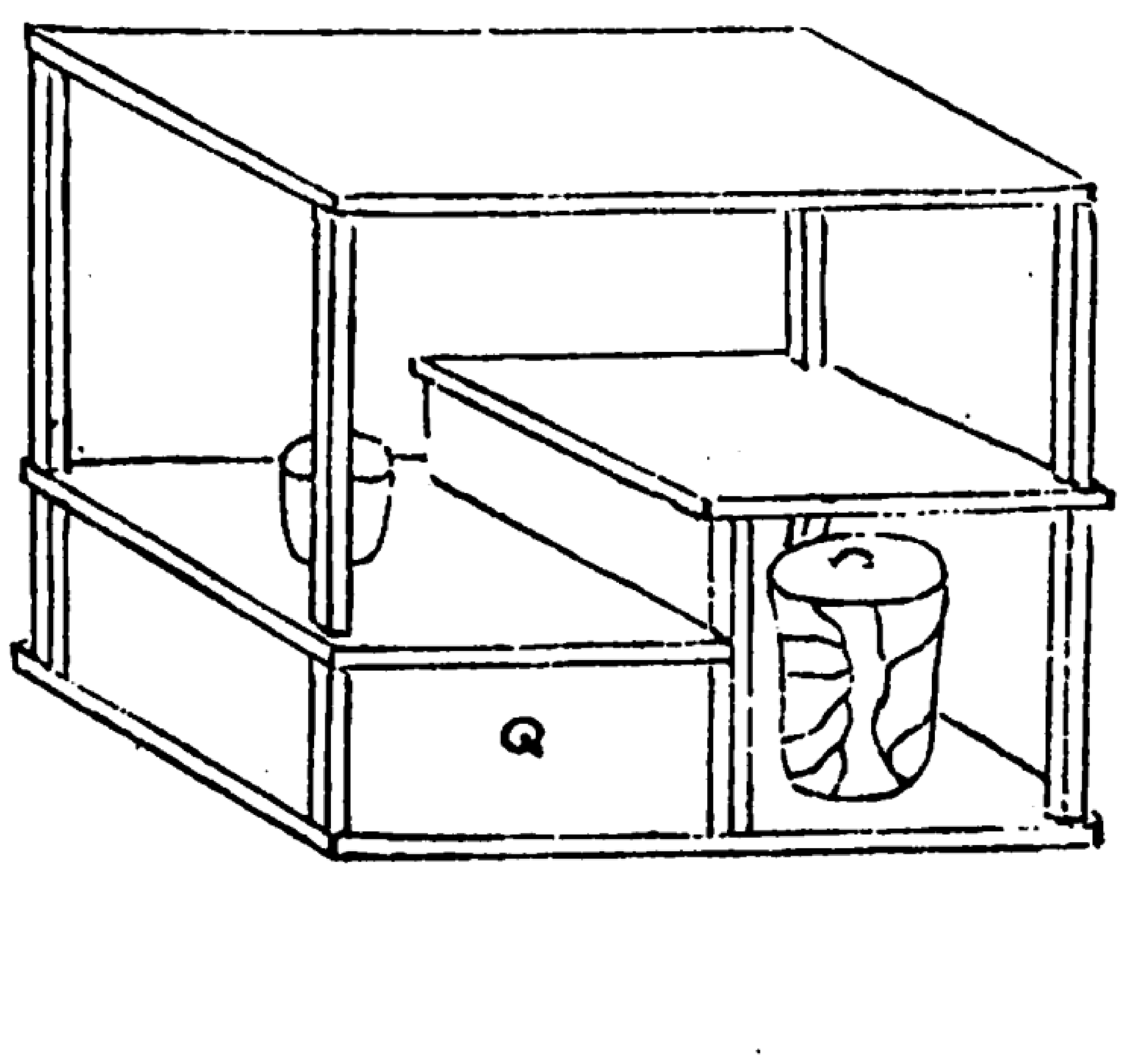
袋棚飾如㆓下圖㆒、此の棚は、桐の木を以て製す。又、名志野棚と云は、志野宗悟の好なり。點前の飾は三通りなり。

不羨曰く、此の棚は、大に立派なるものにて、花月樓の座敷には、至極適當なり。志野宗悟は、香道の達人故香會にも用ひしならん。古昔は、香人は、必、茶道をも學得、又、茶道家も、必ず、香道を學び得しものにて、香付の茶の湯と云ふ事あり。是は、香を專らにして、茶を附屬にし、或は茶の湯の香と云ふは、茶を第一に催して、香を附屬にし、賓客を接對せしものなり。依レ之、香人、茶を學び、茶人香を學び、相互に交際せしものなり。香の道も、東山義政侯抔、專ら催されしものにて、優美高尙なる技、最も、婦女子に相應なるべし。惜哉、維新後、是を學ぶもの無く之を修めたるものも多くは、故人と成て、今東京中僅々に不レ過、予老の考には、是も大日本皇國の一道、各國に、其の比類あるを不レ聽。よりては、有志の令孃貴婦人等、學校業務の餘暇、此の技を學びて、此の道を將來に殘し、此の

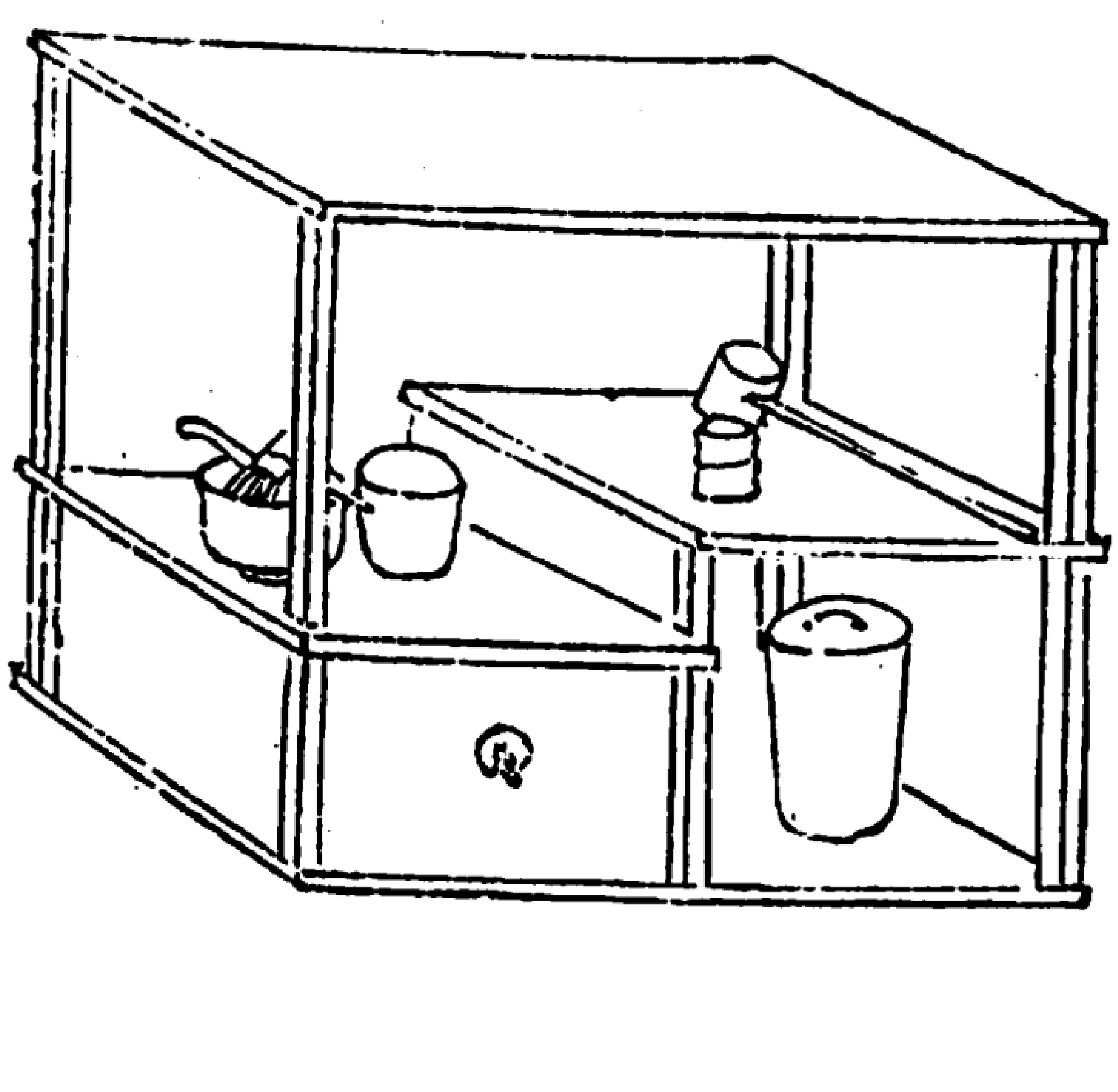
道を樂まば、今の世に流行する挿花抔に比較すれば、天地隔絶とも云ふべし。決して、人に不レ耻の遊藝ならん。日科授業、多き身にても、志を起して、好み學ぶ事は、又別のものにて、隨分成し得らるゝならん、いつくしみ給へ諸嬢等、故丸三翁の無由斷の三字を忘るべからず。利休居士は、茶道百首の巻頭に、其の道に入らんと思ふ心こそ、是ぞ誠の師匠なりけれ。

不羨曰く、其の道は、勿論茶道をさして云ふ。入らんと思ふは、茶を始め着手せよと思ふ心操を確乎と定めたるものなり。是ぞ、誠の師匠とは實に最なり。入りて學べば、必ず得篤するもの故、師匠とも、教師とも、先生とも云ふて可ならん歟。

袋棚
又云志野棚共云大棚なり風爐ニハ不用居前大目ナリ
初飾左ノ方下ノ棚薄茶入如圖
天井飾
眞中
羽箒香合
小形花入
香爐
硯箱料紙共ニ
香斗
ケンドン蓋ノ中ニハ替茶碗菓子入等
可然故宗壽翁口授



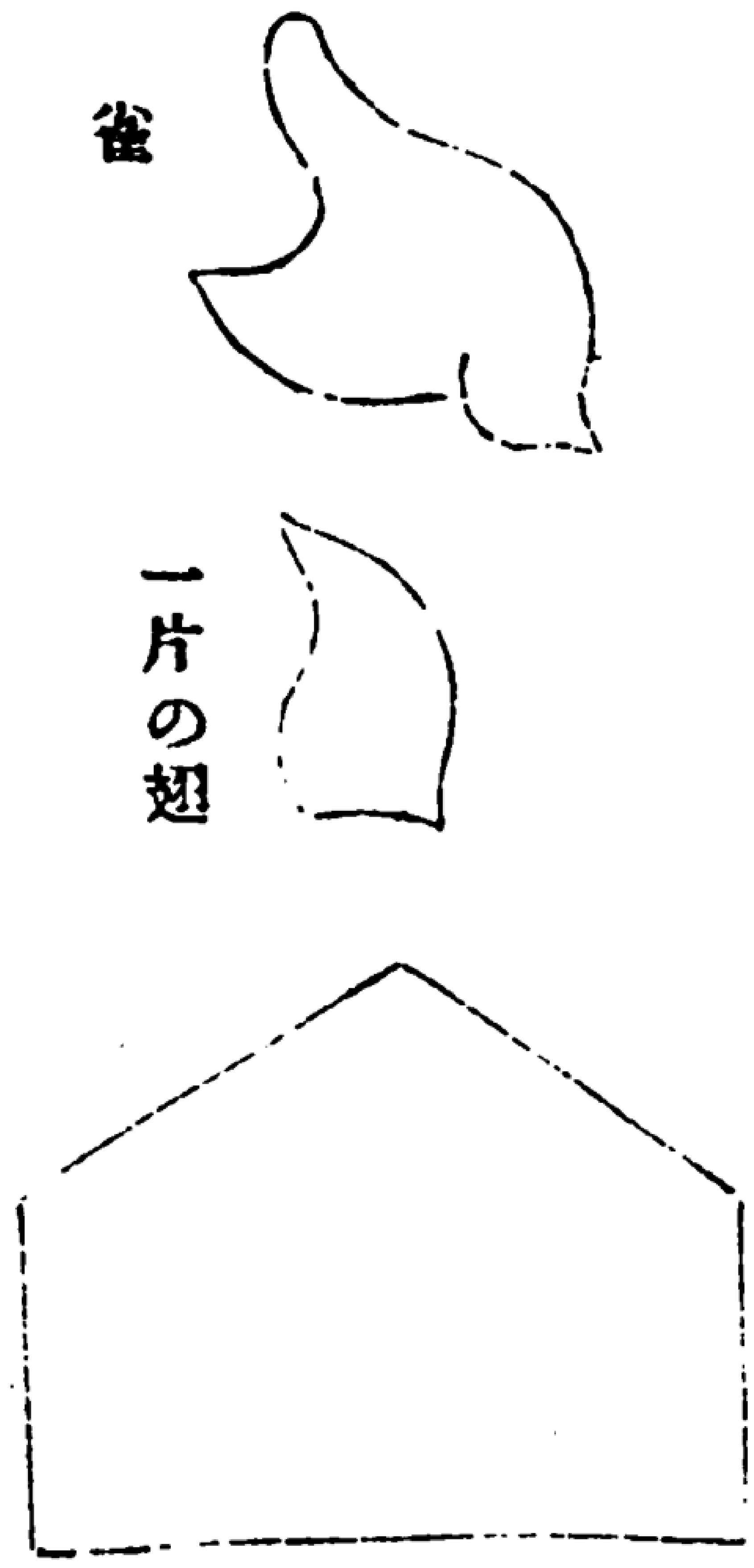
同總飾
次ハ右ノ方上ノ棚柄杓蓋置斗



たちぬひ

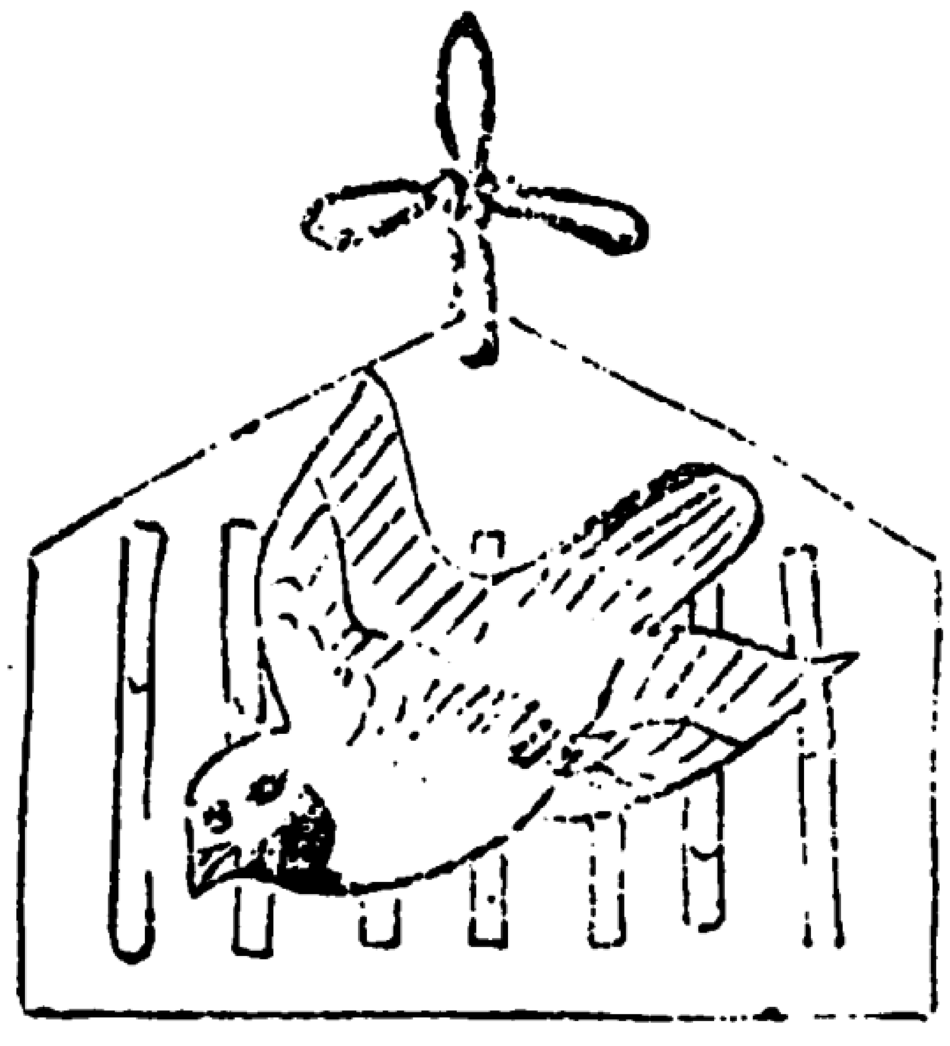
なるこに雀

西山たい子



圖の如く、厚紙をたち、綿を入れ、切をはるに、くびのきつかけわたりをうまくはり、翅、くちばし、目等を畫かき、雀をなるこの上につけ、裏をも例の如く厚紙にて、表のなることよりは、少し小さめにたち、綿を入れ、切をはり、裏表合すべし。なることは、誠のも、紐にて下ぐるものなれば、これは、紐を合せし中に入れずして、なるこの角ばりし處に穴をあけて、通せばよろしきなり。

（その圖）



だいどころ

鮎カツレツ

鮎の腸を去り、能く洗ひ、水氣をとり鹽胡椒をふり、メリケン粉に、まぶし、鶏卵の黄身をぬり、また、ペン粉にまぶし、フライ鍋に、バタをいれ、

火にかけ、バタのとけたる時、鮎をいれ、茶褐色になる迄、打返し、能く燒て、皿に盛り、ソースをかけて、出すべし

鮎魚田

先づ、味噌を裏漉にてこし、摺鉢にてすり、味淋砂糖を、よき程に加へ、其の中へ、鷄卵を入るべし、然すれば、其の味美なる、のみならず、皿に盛る時、他に、着くことすくなし。魚を燒く前に、廿分程、醬油に、浸し置き、串にさして燒き、能く、やけたる時、味噌をつけて、遠火にて炙るなり。

玉葱の煮方

玉葱の上皮を去り、二三分程に輪切になし、一時間程、鹽水に浸し置き、引あげて、牛乳にて煮わけ、器に盛り、上よりバタをかけ食すべし。又、牛の脂膀を、とかし、ゆでたる玉ねぎを炙り、これに、能程の、水と、食鹽、胡椒メリケン粉、少量の、砂糖をいれ、度々、かきまはし、二三十分間程、煮どろ〳〵に、なりなたる時、炙りたる、パンの上にかけて食すべし。又玉、葱の皮を去り、薄くきり、ゆでゝはしぼり、度々、ゆをとりかへてゆで、臭氣のぬけたる時、鷄卵をゆで、きみばかりをちいさくきりて、食鹽を加へ、玉葱ときみとを、能く交せ合せ、味淋の煮きりに、酢を加へ、鹽梅したる汁をかけて食す。

割烹と禮節

石井泰次郎

去る明治三十一年割烹禮節の一編第二節を寄せて禮節上の傳統と教授者の事を論ぜしが、割烹上の事は未だ說き及ぼさざりせ、時恰も本邦割烹學校創設に際したりしに由てなり、今や夏期休業の間を得て漸く其續編を寄する事を得、本編を讀む者は

宜しく百六十二號以下百七十號に至る前號所論を照合熟讀せられたし

第二編　割烹敎授

近來割烹敎授法の必用を唱導する者、日に月に其の數を增加して、女子の學校に、其の設なきは、僅にして、大方皆、其の敎授法の一科を置かれたるが如し、此は、家事科修身科の學事の進步と共に共に、其の必用の熱度を高むるに由てなるべし。扨、其の敎授法の如何は、我等の能く伺ひ知る所に非ずと雖ども、其の程度を得て、過不及無く行はれたるには有らざるが如し。然れども、幸にして、此の割烹敎授の必用を感ずる時に遇ひて、其の敎師を得て、其の科目を全うせしめんと欲するを得たる者あり。是に由て、敎授法の完全も、近に見る事を得んか、余輩が切望する所は、此の敎授法の完全なり。

今、此に、其の敎授の今昔をいさゝか說明せん。

余輩は、文章生に有ざられば、文章言語の賤劣にして、讀者の解する事能はざる條々も多からんに由て、成可簡短に條々を分別して說明すべし。

第一節　近來の敎師と敎授法

現今の敎師、及び敎授法、の大略を見聞する、所に由て擧ぐるに先だちて、先、其の敎師と云ふ者の傳統と敎授法との傳來の所謂を略述せん。第一、其の傳統を質しゆけば、今昔共に割烹講師は四條流の流を汲める者なりと確定するに到れり。其の古傳を調理し斬新の流行の割烹する者も、悉皆、此の流末ならざるなし。古傳とは割烹上の有職故實を質したるをいひ。斬新流行とは、泰西の調理法を捕獲來りて、其の業に隨ふ者を云ふなり。四條流とは、臣民の間に行はれたる料理法の傳統の名稱にして、其の起源は、僅に一千有餘年を經たる昔時に有れども、其の流水の勢力は、遙に無

數の年月を以て進み來れる、本邦料理法の上に超越したるなり。

本邦料理の名稱を有せる、元素正しき料理法の傳統は、いはまくもかしこき皇室の御厨子所に屬せる料理法をいふなり。此の以外に於ては、單に本邦料理の名稱即ち、日本料理を以て唱呼する事を得ざるなり。

かくの如く、盛大なる勢力を以て、古傳を保存し、流行の溶化せしめて、一流の内に捕獲せる、四條流は、尙幾萬歲の後に到るも、其の傳統を絶たざるべし。

嗚呼實に割烹敎師は、悉皆四條流の流を汲みて、其の傳統を保存し、其の流祖を尊信せざるべからず。是に倶ひて、其の敎授法も建設せざるべからざるなり。若し、臣民間に料理法を講じながら、其の流祖を知らず、其の流末たるを解せず、自ら敎授法を生成たる樣に心得たる者有らんか、是、本邦近時の臣民に有らざるなり。如何に完全なる敎授法を編成する上手有とも、自ら編成すとのみ思はざれ、四條流の流祖の惠に由てなし得たると思ふべきなりとは、余輩が現今、敎授者に向て希望する所なり。

抑四條流の流祖に附て、其の傳統を略述せん。

四條流は小松の御門光孝天皇の御代に湧出せる所、其の流祖の傳記は左の如し。

藤原山蔭卿

○大職冠鎌足公、七世之孫、高房公第六子也。母、參議從三位刑部卿藤原眞夏卿之女也。○淳和天皇天長元年甲辰生○文德天皇仁壽四年甲戌春正月爲左馬大允○齊衡三年丙子春正月爲右衛門尉○三月遷左衛門尉○天安二年戊寅春三月爲春宮

大進○秋九月十四日爲左近衞權將監○冬十月補藏人○淸和天皇天安二年十一月七日授從五位下○貞觀元年己卯春三月二十二日爲備後權介○二年庚辰秋八月二十六日爲右近衞門少將○三年辛巳春正月十三日爲伊豫介○五年三月二十八日爲次侍從○六年甲申春正月七日授從五位上○九年丁亥春二月廿九日爲美濃守○十五年癸巳春正月七日授正五位下○十六年甲午春正月十五日爲備前守○十七年乙未春正月二十一日授從四位下○三月爲藏人頭○秋八月二十三日轉權中將守如元○陽成天皇元慶元年丁酉春二月二十九日爲右大辨○三年己亥春正月七日授從四位上秋八月十七日兼肥後權守○冬十月二十三日任參議○四年庚子春正月十一日兼備中守○五年辛丑春二月轉左大辨○秋七月十六日兼播磨權守○六年壬寅・春正月七日授正四位下○仁和二年丙午六月十三日勅授從三位幷中納言○三年丁未春二月十六日勅以㆓更衣從五位上藤原朝臣元善㆒爲㆓女御㆒中納言從三位山蔭之女也○夏五月十一日以中納言從三位藤原朝臣山蔭爲兼民部卿○四年戊申春二月四日薨春秋六十五云々

右傳記は、伊達家に傳ふる所、伊達家は卿の末裔なり。卿の末は、仙臺の伊達家に傳はれり。然して、近世伊達家に割烹の達人あり、仙臺に割烹の好著述有り。





漢文學講義

佐々木天游

茗甕廿勝小記（承前）

鹽谷岩陰

寛永寺晨鐘記の第十八

寺當二甕之艮位一。即大城鬼門鎮護之所。亦似下爲二文廟一壓中不祥上。晨鐘以代二大昕徵鼓一。用二浮屠之器一。爲二膠庠之備一。道之包容如レ此。

寺は甕の艮位に當る。即ち大城鬼門鎮護の所なり。亦文廟の爲に、不祥を壓するに似たり。晨鐘以て大昕徵鼓に代ふ。浮屠の器を用ひて。膠庠の備となす。道の包容此の如し。

寛永寺は寛永三年に、徳川家光の創むる所にして即ち今の上野公園内寛永寺のことで御座ります。偖寛永寺は、茗甕の東北の方位に當りてをります。（易に在りて、艮卦を東北となす）東北は、丑寅の方で御座りまして。方位家などの申まする鬼門の方であります。（風俗通に、東海度朔山有二大桃樹一蟠屈三千里。其卑枝向二東北一曰二鬼門一萬鬼出入也云々とあります。是が鬼門の說の起りであります。即ち、そこで、茲の寛永寺本々大江戸城の鬼門を鎮め護りて、不祥を鎮壓するの場所で御座りますが、兼て、亦昌平大學の東北に當りて、其の鬼門を護りて、災禍（不祥はめでたからぬことにて、諸の災禍を謂ふ。）を鎮め壓へて、鬼門の守護をなしてをる樣であります。さうして、寛永寺の夜明の鐘（晨はあしたなり。晨鐘はあけむつの鐘のことなり）の聲を以て昌平大學の曉

の時大鼓に代用して、寺の鐘を以て、學校の大鼓に代へ用ゐます。(昕は旦なり。日の將に出んとすることを謂ふ。徵は召なり。人を呼び集むることであります。禮文王世子。天子視ㇾ學。大昕徵鼓。註昧爽擊ㇾ鼓以召ㇾ衆也。又疏昕猶ㇾ明也とあります。夜明に大鼓を擊鳴して、諸生を召し集るを、太昕徵鼓と謂ふ。)そこで、浮屠(浮圖に同じ。梵語なり。或は、佛陀と云ひ、或は、浮屠と云ひ、或は、部多と云ひ、或は、母馱と云ひ、或は沒陀と云ふ。皆五天竺の語なり。譯して覺となす、畧して之を佛と稱す。)即佛者などゝ云ふに同じ義と心得べし)即ち佛者の器具を(鐘は佛者の器具なり)以て、膠庠の學校の(膠庠は、學校の事なり。くはしきことは、已に前號に辯じぬ。就てみらるべし)備具となし、(備は具に同じ。矢張道具のことなり。)寬永寺の晨鐘を以て、昌平大學の曉鼓に代へ用ゐてをります。我が道の包ね容るゝこと此の通りで。佛者の器具を容れ用ゐて、學校の道具となしてをります。亦以て、我が道の大なることを知るべきなり。

芝海朝爽

芝海在ニ距ㇾ黌數萬步之東南一。波光瀲灔。隱ニ映於ニ高林之巓一。紅暾從ニ彩霞中一迸出軒々如ニ會稽王來一。

芝海は黌を距る數萬步の東南に在り、波光瀲灔。高林の巓に隱映す。紅暾彩霞中より迸出し、軒軒として會稽王の來るが如し。

芝海は即ち芝浦のことであります。朝爽は夜明のことであります。一爽は明なり。朝爽は夜明のことなり)偖て芝海は、茗黌を距り離るゝこと。數萬步の東南の方に當りてをりまして、學校より、芝浦までは、東南數萬步を隔て離れてをりますが

其の海水の波の光が瀲灔(瀲灔は水動くの貌なり)と動きさらめきて、高く樹木が聳えて、林ををなしてをります所の頂巓に隱れたり、見れたり致してをります。(映はうつるなり。隱はかくるなり。隱映ば隱見に同義なり。)さうして、夜の將に明んとする頃は、紅の赤き旭が(暾は朝曦なり。)昊のことなり)色取たる(彩色文なり。いろどることなり)霞の中より、迸り走り出て昇りて、軒軒は高出衆貌也)明かに輝くこと、譬へば、猶會稽王の司馬道子が、來る樣でありますが(會稽王のことは世說に出でゝをります。世說に海西時諸公每朝々堂猶暗唯會稽王來。軒々如朝霞擧會稽王謂道子也とあります。本は會稽王司馬道子の軒々と高く衆人を出でたる風采を、朝霞の擧るに比したものでありますが、今は却て紅暾の朝曦が、霞の中より軒々と、ほのめきて高く上る樣を、會稽王に比したものであります。

運嶽晴雪

朝暾之前。暮霞之際望岳於駿岡之西。突兀萬仭。芙蓉蒂天。何處無是觀。唯贍諸蒼溪翠樾之表最佳。南至日。峯尖呑落日。殊爲絕奇。更應以朔旦冬至之歲審驗之。

朝暾の前、暮霞の際、岳を駿岡の西に望む。突兀萬仭、芙蓉天に帶す。何の處か是の觀なからん。唯蒼溪翠樾の表に瞻る、最も佳なり。南至の日。峯尖落日を呑む。殊に絕奇となす。更に應に朔旦冬至の歲を以て、審に之を驗すべし。

蓮嶽は富士の山のことであります。晴雪は、晴たる雪景色なり。偖、朝暾の旭の出る前、又は夕方の霞のかけたる時に、(際は間なり。時に同じ)富岳を駿河臺の西の方に當りて、望みながむれば、

突兀と虚空に聳え峙ちて、萬仭も高く秀で、そります。八尺を、(仭と云ふ。萬仭は、八萬尺なり)さうして、其有様は、芙蓉の蓮の花が、天に蒂して、(蒂はへたなり)八朶の蓮華が、天にへたして、天より開くが如き様である。しかしながら、それは何處無二是觀一で。どこより眺めても、富士山は、是の芙蓉天に蒂するの姿で、どこまでみても矢張同じ是のながめである茲所計に限りたわけではない。然れど唯々、富岳八朶の芙蓉を蒼々として、青き溪、青々として翠りなる木影、(字書に雨木交レ陰之下曰レ樾とあり。木影のことなり)の表に一表は外、又は上など謂ふに同じ)望み瞻る。之を最も、第一の佳景となす。是が茲所の餘所と異なりて、富岳を望むに佳き所以である。さうして南至の日。(南至は日輪が行きて、南に至るの日を云ふ。冬至のことなり)で日が南に至るの冬至の日になりますと、富士山の峯の頂きの尖りたる所が、西に落る日影を呑みて、落日か丁度富士山の頂の尖りに隱れ落る樣になる。是が殊に別して奇絶となす、(絶ははなく〵だと謂ふことなり、)のである。そこで更に改めて、十一月朔の旦の冬至(冬至は、孝經說、冬至有二三義一。一曰陰極之至。二陽氣始至三曰行南至とありまして、茲三の理窟がありますからして、此の日を冬至と名けたのであります。)の歳を待と受て、以つて審に詳く、之を驗じて、(驗はためすことなり。)峯尖落日を呑むの、奇景をためしみるべきである。偖茗甕勝小記は。此の一篇にて終りになりまして御坐ります。左の一篇は。此の小記の後序の樣なものであります。

大學中不下可敎二子弟一有些間思上。然胸間無二餘地一者。不二足一以學レ道。風二乎舞雩一。觀二乎呂梁一。洙泗

所レ不レ禁。一草一木。亦足レ資ニ格致ー。紀ニ勝景ー以導ニ文思ー。令下ニ學子ー依焉以攄中辭上。可三以發ニ性靈ー。可三以觀ニ才情ー。亦育英之一樂也。

大學中子弟をして。些の間思あらしむべからず。然も胸間餘地なきものは、以て道を學ぶに足ず。舞雩に風し、呂梁にみる。洙泗の禁せざる所。一草一木、亦格致を資くるに足る。勝景を紀して、以文思を導き、學子をして、依て以辭を攄しむ。以性靈を發すべく、以て才情を觀るべし。亦育英の一樂なり。

前にも申上ました通り、玆篇は、廿勝小記の跋文であります。偖て大學校中に於いては、諸子弟をして、道を學ぶの外、些少でもの、間思雜慮あらしむべき者でない、とは申しながらも、胸間の胸の中に綽々として餘地なく、胸の狹くして窮窟なるものは、以て道を學むで、道に入るに足らざるなり。そこで、舞雩（舞雩は、天を祭り雨を禱るの處にして、壇墠あり。樹木あるなり）の天を祭り、雨を禱るの壇の涼しき風に吹れ。（風ニ乎舞雩ーは、論語の先進第十一に見ゆ。呂梁の懸水を觀る。（莊子達生篇云孔子觀ニ乎呂梁縣水三十仞。流沫四十里云々と。梁は石ありて、水を絶つの處を謂ふ。呂梁は、彭城郡に在り。）は泗洙（泗洙共に水の名なり。孔子道を泗水洙水の間に講ず。故に孔門を泗洙と謂ふ）の孔夫子の敢てそんなことは、してならぬと、禁止し給はざる所である。さうして、又、一の草や、一の木でも、亦、矢張格物致知の道理を資け、助くるに足るものであるから、穴堅に擯斥すべきものでない。（格致とは、格物致知のことなり。大學に曰致レ知在レ格物と。本、吾の知を致さんと欲せば、則ち物に即て、其の理を窮むるに在りと謂ふの意なり。）勝れたる景色を紀し誌

して、以て文詩の思想を導き誘ひ出し、學子々弟をして、之によりて、(依焉は、之に依りてと云ふ程の意なり、以て文辭を抒へ綴りて、(攄は抒なり)以詩文を作らしむべく、依りて、以性靈を發起して、子弟の性質を涵養すべく、依て以て子弟の才情の才思を見るべく、其の諷咏する所をみて、其の情志の在る所をみるべく。其の諷咏する所をみて、其の才藻の有る所をみるべし。是亦、英才を育ふの一の樂なり。然らば、則ち余が、廿勝小記を作る、亦何の妨かあらんやとの意なり。





將來の日本國民（五）

肝付兼行

國土の廣袤と人口、世界圖を繙きて、各國の地積を總覽すると、我が國は、地積に於て廣くないものであるから、大抵な人は、唯、之を一覽したのみで、嗚呼、狹いものだなーと嘆息しますが、唯狹いというて、嘆息されては困るのである。何となれば、我が國は旣に述べました如く、大都會の中心ともいうてよい位置に在るのであるから、例へば、其の百坪は、田舍にある千坪にも、又一萬坪にも勝るものである。さうして大にしては、國

土、小にしては宅地に至るまで、地面の價値を定むるものは、第一が地位、第二が地形であるから都會の地面は、田舍の地面より貴く、間口に廣い地面は、奧行に長い地面より貴いのである。されば、我が國は、好地位に在るのみならず、地形は而かも四方間口であるから、狹いというても、何も憂ふるに及ばない。現に、其の領土に日沒を見ないといふ英國も、其の本國は、我が邦里の二萬三百七十五方里で我の二萬七千六十餘方里に對しては、實に四と三との比例をなすのである。仍て我が國も、英國の如く利用さへすれば、英國の如く世界に雄飛する事が出來るのである。又、國の强弱は國土の廣狹に因るものではない、墺國の碩儒故スタイン氏も言うて居る。「國の强弱は、人口の多寡疎密と、文化の進歩如何に決すと、さうして又、文化の進歩は、國民の元氣と學生の敎育に因る。」と謂うて居る。乃ち前者は有形の要素で、後者は無形の要素であるが、有形の要素は自から働らくものでない。つまり無形の要素で仕掛られて、働くもので、即ち、後者が囃し方なら前者は踊り手である。又、先輩の言に、國の强弱は、國家の大小には因るが、國土の大小にはよらぬ」といふ言がある。實にさう思はるゝ。即ち、國家は國民の團體で、國民は國家の分子である。國民の多いのは、即ち國家の大なることになるのであるから、其の意に於ては、スタインの言に異らぬのである。然らば支那人は、我に十倍する人口を有しながら、何故に我に負けたかと云ふに、支那は、人民は、多くても、文化が全無で、というては少しひどいが、マーそんなもので、即ち踊り手はあつても、囃し方がないから、狂言がやりきれなかつたのである。扨、我が國は、人口は、比

較的に多數の方で、マー世界、第一流の人口國というても宜しい位である。即ち露國が一億二千九百萬、北米合衆國が七千四百萬、獨逸が五千五百萬、次が我が大日本帝國で、四千四百萬、之に臺灣の二百七十八萬を合すと、殆ど四千六百八十萬の人口がある。さうして日本に次くのが、墺地利匈牙利で、四千四百萬、次ぎが英國（本國）で四千百十九萬、次が佛國で、三千八百六十二萬、次が伊太利で、三千百六十七萬であります。さうして、其の次がズット下つて、西班牙で、千七百六十萬でありますから、現今では、先づ三千萬以上の人口がなければ、强國とは申されませむ。故に我が國は、人口に於ては、世界第一流の國家として、大威張に威張てよろしいのである。又人口の疎密の點から見ても、露は一方哩に十三人で、我が方里では、此の六倍、即ち、七十八人に當り、米が全じく、我が一方里に百四十八人、然るに、我が國は、一千七百六七十八人であります。世界中で、一國として、人口の最も密な國は、白耳義で、我が一方里に、三千四百人であります。然し、其の國の面積は、我が一千九百二十五方里で我十四分の一に足らない。我が東海道は、二千六百方里で、白耳義より廣いが、一方里で、平均三千七百人、殊に、埼玉縣は、平均四千三百十五人になつてをります。さうして、我が畿内は五千七百人でありますが、英國は、全國の平均が一千九百七十三人でありまして、我が國よりも、全國の平均で、二百人多い。疎密より、公平に判斷すれば、英を除くの外、我が上に立つものはありませむ。和蘭の如き、我が一方里に、二千三百人ではあるが、全國の面積が二千二百方里で、我が面積の十二分の一であるから、到底比較にならない

我に次ぐものは、伊太利で、千六百人、次ぎが獨逸で、千五百人、次ぎが、佛蘭西で、千二百人、我が臺灣は、二千二百六十方里で、其の人口が、二百七十八萬であるから、一方里で、二百三十人ので、此の未開の新領土ですら、佛國よりも、少々密な次第である。故に、人口より論じても、我が國は、大國家たる資格の十分にあるのであります偖、地位、地形、國土の廣袤、人口の四要素には富むで居るが、是即ち、有形の要素であるから、無形の要素の發達せぬうちは働かない。是より無形の要素の要素たる國民的品性と政體とを述べて此の有形の要素の何故に働かないかを明らかにしませう。

他山の石

岐蘇　小東洋子譯

（二）ナポレオンの母（ツヾキ）

一千七百九十九年十一月九日、ナポレオン攝政官を止め、始めて顧問官となれり。彼は實際上佛蘭西の獨裁ナポレオンたりき。大統領となりし事は近代歷史を繙く者の熟知する處なり。其の時ボナパート夫人、及び、彼の小兒等が、コルシカ島を去りし以來、六年の星霜を經、彼女は今は、艱難より救はれ、子息の出精に希望ある時となれり。アブランテスが謂ひし如く、ジュノト夫人は謂へらく、「母との愛着は、實に密なりき。ナポレオンが幸運の曙光により、母レチチアに、彼の利得の一部を割與するは、自然にして、之に依り、母は比較的困難の境遇より、いと平和なる愉快の有

樣に至れり。千七百九十九年の革命に依つて、ナポレオンは、代議政府の頭となりぬ。后母ボナパートは、小供等と共にパリスに引移り、最も閑靜の生活を送りぬ。去れど、ナポレオンが皇帝の位に昇りし千八百四年以前より、社會の注目をして彼女に注がしめぬ。彼女は、マダム、メール、の尊稱を受け、一萬フランクの恩給を與へられ、殊に參政の權を有せしむる爲め、彼女は、凡ての慈善會、其の他の此の主義の團體の總理に推撰せられたりしが、其は、實に王の母に、適當なる職にてありき。ナポレオンは、常に謂へらく、余が母は、婦人の身を以て、大に婦女子のため又男子の長となり。多くの場合に於ては、余の母としてあり得べき剛毅と、寛大をあらはす事ありと言へりナポレオンが、帝王となりし後、速かにセントクラウドの庭園にて、母に不意に逢ひし時、半ば戲に、半ば嚴しく、接吻を受くる爲め、母に手を差出しゝ時に、母は怒りて、其の手を撞き返し、諸官の面前にて、叫びて「汝に生命を與へし母の手を接吻するは、汝の義務にして、余より接吻を受けんとは何事ぞや」と言へり。

彼女は一瞬間も、過去の苦しき經驗を忘るゝ事なかりき。殊に彼女の吝嗇の習慣も、家族が未來に於ける不幸を恐縮して、かく豫防をなせり。

後には、公爵となりしジュノー夫人謂へらく、「メール夫人は屢々過去の出來事に就き話されたれど、余の最も深く感銘せしは、千七百九十九年迄の六年間の事にて、小兒等の境遇に幾多の變遷を來し、殊に獨りなる上に弱はき夫人は、コルシカより追放せられし時は、實に苦中の苦にて、小兒等は苦痛を感じ、歩行する克はず。若き者を腕に抱き、腐りかゝりた小舟に乘り、辛うじて危

険を冒かし、岸に達せし事は、如何に同情の涙なくして可ならんや。夫人が、此の境遇を談話せし時は、其の辨流暢にして、其の顔色もいと美はしかりき。即ち、八日の革命終りを告げ、パリスは、最早や平和なりき。余は夫人を訪問せしに、彼女はジョセフと共に住居し、夫人は平安の心地はなさゞるも、又、沈靜の容采あり。何か時ならぬ聲、彼の夫人の耳に接する時は、一層青ざめ、且つ心の激動を來す、性質を有するが、之れが爲め夫人に迄一層幽想の風姿を與ふ。此の時は眞に彼女は、ロマの大政治家、グラチスの母の如く、見え、夫人の位置は一層、其の理想に近付かしめたるも、其の有名なるグラチスの母より、夫人の、猶多くの困苦に遭遇せり」と、彼女の品性に於ける瑕瑾は、如何にあるも、若しも、彼女がナポレオンの品性に於てあらはれたる、瑕瑾の一若しくは二を有せざるに於ては、ナポレオンの母たるに適せざりしならん。然れども、彼女は全力を以て、子息ナポレオンの利害の爲めに盡せり。ルンエンの外、凡ての子息が、帝王となりし時、彼女はルシアンの爲めに、帝王に請願して止まざりき。ナポレヲンが、何故母は他の子息を愛するよりも、一層ルシアンを愛するかを問ひし時、母は公明に「我の最も愛する子は、常に最も、不幸不遇に居る子なり」と答へたり。彼女はナポレオンよりも、一層、謹心に、且つ先見家でありしは、種々の事情に依りて窺ふこと得。公爵Enghienを捕縛せられし事を、ジョセフインよりの通知に接し、彼女は、第一の攝政官ナポレオンのありし、チユイレリースに趣き、彼の紹介にて、諸官吏に愛接し、平身低頭して、不幸なる公爵を許容せし事を、請願して止まざりき。彼女はフォンテンブローに於

イロ―マ法王の、ナポレオンに對する待遇に就き不滿足を抱き、彼女の弟、牧師フエスチに向つて、「汝の甥ナポレオンは、斯の如き方針を常に持する時は、其の身を亡ぼし、我等迄も、其の難にかゝらん。願くば、彼の今や將さに失はんとする凡てを握りて、其の立たんとする處に止まるを望む。余は、全家族の爲めに、憂慮する甚だし。今は、降雨なき前に牆塀をなすの必要を信ず」。ナポレオンが、第一攝政官、又は、帝王となりし時、母に向て、充分なる金錢を送しのみならず、吾人が知る如く、宮城内の美人のあるものをして母の家政萬事を握らしめき。(中畧)只彼の母の友人として、母の年齡程老たる寡婦ハーモン女史と結婚せんと、大に熱心せしは、實に彼の好奇心を知るに足る。彼は後年、ジヨセヒインと結婚せり。千八百十四年の夏ナポレオンがエルバ島に流竄されし時、母は妹ポーリンと同伴して、彼を、エルバ島に訪ひぬ。不遇の境涯を慰問するためなりき。彼の最後の流竄處なるセントヘルナにありし日、母は眞情濃かなる手紙を送り、彼に就ての希望と、注意を認め送りぬ。母は英國の醫師は彼の長く苦しみ居る、狂氣病を治療するに、左程重きを置かざるを恐れて、遂に醫師と共に、從者を送りき。其の病氣の性質に就きては、彼の死後に至る迄知らざりし。セントヘレナ島のロングウツドに於て、千八百廿一年四月十五日書かれたる遺書の七節に謂へらく、「余は余の最も尊敬する母、及び、其の他の肉親の者が、余の如き者の爲めに盡したる厚情を謝するに辭なし。余はルイスが千八百二十年に於て、出版したる誹謗書に就き虚僞の證明をなせり。」と無法の一書なればなり。

(未完)

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十）

白松園主人

斯くて、瀬川吉次は、九州に赴きて、合戰時を經て、漸やく賊を亡し、鎌倉近く歸り來らんとする時、嘗て秋布を眷戀する鼠川武行といふ姦者、長城野某といふ者と謀りて、その半途に待ち伏して、之を害せん事を謀りぬ。危機一髪かくとも知らね吉次は、大磯小磯うちすぎて、夕日斜めに落つるころ、相模の國動の礒にさしかゝりぬ。礒馴松かげに、待ち設けたる奸賊等は、吉次の伴者の遙におくれたるに折よしと射落して、首斬り取らんとせしに、詐り死せし吉次は敵と引き組みながら、海中に落ち入りぬ。是に於て敵は既に海中に沈み失せし者と思ひ、跡を晦まして逃れぬ。され

ど吉次は死にしにあらず、遠く流れて、人に助けられしも、負傷のため廢人となりて、長門にありしことは、後に至りて知られぬ。秋布も鎌倉の執權も、其の他の諸臣も、吉次の家臣も、皆敵のために殺されて海に沈められし者と信ぜり。即ち、秋布は、悲泣のあまり、髮を絶ち志を勵まし、憤然として亡夫復讎の征途に上りぬ。さはらば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなんとする玉篠の霰にも似たる、いともかよわき秋布が、二十に足らぬ年なるに、いづこをはかと定むべきよすがもなきに、千里の旅程に上りて、具さに苦楚を嘗むるといふ。はかなく悲しき境遇に陷りぬ。只之を慰めて、唯一の力種となる者は、僕俊平あるのみ。彼は心を盡して、亡君の妻を衛護奬勵し、之を扶けひきて、同じく征途にのぼりぬ、都は繁華の地なれば、仇の潜伏ずる事もあらん、と先づ東海道

を西に上りぬ。

野を過ぎ山をうち踰ゑて、露に宿り風に梳り、狎も習はぬ草枕、旅寢のうきを身にぞ知る。草鞋に足を傷られては秋ならぬ路のべ芭草の葉を血しほに染め、孤村に宿りを求めかねては、夏の夜の月かげに送られて、なほ行くめり。

之、先づ、其の筆端にあらはれし、旅程の光景なり。かくて彼は華洛をあさる事四五十日にして、仇に得逢はず、即ち浪華に赴きて索んとて、八幡まで至りし時日は傾きぬ。更に行くこと一里許にして、日は全く暮れぬれど、宿貸すべき家もなしかゝりせば八幡に宿るべかりし者を、餘りに路を貪ぼりて難儀に及べり、と悔めども、今更ひきかへさんも徒なれば、復走ること數町にして、ゆくての茂林のうちに閃々たる火光を認めしかば、とく行いて宿りを求めんと、歩を急にして到りて見れば、人家ならで古寺なり。

樹垣をゆひめぐらしたる東面に、彌少なる木門ありて、栗の素撲を柱にしつゝ、偏哲庵といふ三大字を彫りなしたる、樟の生花石の扁額を揚げたり。

主從は、この有樣を見て、道場に女子を留むるか否を知らねど、試みに門戸をうち叩きしに、同宿の沙彌なるべし、裏面より誰ぞと問ひかけながら、紙燭を秉りて立ち出でしが、左右なく門を開かず、間近く戸口に立ちよりて、闚き見る事半時ばかり、來れる者は誰ぞと問ふ。

暫らく物を考ふる時「半晌ばかり」といふは例の馬琴が熟語なり。「呆るゝこと半時ばかり」といふ語の、八犬傳に、尤も多きを見るべし。おもしろき語といふべし。

登時倹平進みよりて、これは八幡詣して、浪速へ赴く行客なるが、思はず路を貪りしより、宿とり後れて難儀に及べり、伴侶には一人の女子ありそは某が妹なり、若き女子を道場へ留めがたく思ひ給はゞよしや軒下に立ちあかすとも、露宿す、

ろには増すよしあらむ、大慈大悲を垂れ給へさ、辭せはしくたのむになむ。

沙彌は主僧と商議して、遂に一宿を許しぬ。且つ夕飯をさへに饗しけれど、主從は大によろこびて謝して曰く、

慈悲善根を旨さしたまふ、活菩薩にあらざりせば、さる歎待には遭ひがたからむ、佛緣ありて、佛地に宿りし、これわれ〳〵が幸ひなり。

たのもしき法師と思ひしは、豈に圖らんや、恐るべき盜賊にて、人を宿して之を殺し、衣服を剝ぎ路纒を奪ふ兇惡なるが、その人を欺むく爲めに、心にもあらぬ入道となり、無住の廢寺を利用して、旅行を惱ます奴なりけり。さりとは知るよしもなく、此の寺に宿かりし秋布主從は、思ひもかけぬ禍におひて、命も殆んど危うかりしに、計らずも主從を助くる者あり、僅に虎口を遁れて、葦が花散る浪速へと赴きぬ。その地を評する草子の地は左の如し。

原是浪速は、都會の福地、船舶日々に入津して、萬物輻輳せざることなく、商賈貿易の港にして、民の竈は賑ひぬ。こゝも亦石上ふるき都の迹にしあれど、平安京に比ぶれば、目に山水の勝景なく、只海水のみ眺望あり、是れ俗地さいふべきは、間に疎まろべく、これを福地さいふ時は、守錢虜の譏を得つべし、

かくて、秋布は俊平と共に、大阪天滿のほとりなる旅店に宿りて、日々に仇を尋ねすといふことなし。嗚呼、此の主從が、仇を求むるに困難なるはいはでもの事ながら、主從とはいへど、若き男女なり。如何に義に堅き者といへども、碎け易きは、人の情なり。既に此の弱點あれば、人の疑を避けむ事尤も難し。抑も、此の村澤俊平は、稀なる義僕にして、其の氣金鐵の如きことは、始めより知りて、仇討に從へたる位なれば、さる浮きた

る心は固よりなし、馬琴之を辨ずる事いとおもしろし。

主從、日毎にあちこちと、徘徊せざる隈もなく、仇人鼠川嘉二郎が、在所を索討めつゝ、又いくばくの日を彌るに、三伏の炎暑やうやく冷て、魂祭る宿、月見る臺、ふみ月八月と過ぐるまに〳〵、わが宿の、いさゝむら竹うちそよぐ、夕ぐれ毎の萩のうは風、そよめりけむ、さらぬだに、秋に悲しきものなるに、堺を出ですと誡めたる、閨秀麗人の幸なきや、親を喪ひ良人におくれて、苫に寢れ、戈を枕とし、萬里の逆旅に仇をたづぬる秋布が、心盡しはいふべうもあらざるべし。ゆくときは杖と憑み、坐るときは脉卓とも思ふものは、俊平只一人のみ、彼れも亦さるものにて、愼みふかく見ゆめれど、男女席をおなじうせず、みづから授受すといはれし、禮を忘れたるにあらざめれど、旅にしあればそれも甲斐なし。疎めば辭敵もなく、親しめば彼安からず、左に就けても、右に就けても、心ばいさゞ休らはぬ、旅宿ながらに年くれて、浪速に春を迎へても、仇人のありかを知るよしもなし。

「愼みふかく見ゆめれど」など評するに想像助動詞

を以てし。兎角につけて心安からずなど、何となく氣遣はしげに、また澁りがちに、筆をまはしたるは、やがて之後段に至りて、夢に美玉を摧く條の、伏線なりと知られたり。讀者よろしく、之の處に留意したまへかし。

世は暖にならん頃、肥の國に趣きて、……鏡の宮へも詣うでんとて、なほも天滿にありけるに、如月の下浣より、秋布は何となく、心地煩はしく見えしかば、俊平いたく驚き憂ひ、醫師を招きて藥を求め、さま〴〵に勦はるに、然りとてうち臥す程にもあらず、只をり〳〵に痞おこりて、苦むことの大かたならぬも、痊れば又忘れたるが如し、こは全く思ひ屈したる氣のかたとかいふ病痾なり、氣長く保養するこそよけれ、と醫師もいへば今さらに、舟行たりとも西國へ、赴むかんこと叶ひがたかり。とかくするほどに春は暮れて、日影いぶせき夏は來にけり。

男子といへども、かゝる旅中に病にかゝるは有りがちの事なり。況んや、女子は、必然の事といふ

べし。但し大事の前なれば、千金の身を重んずべきはもとより論なし。主従の驚き憂ふるは、その位置に立ちて見ざれば分らず。

然るに天満の旅店は、西面にて暑氣に堪へ難く、夏を送るべうもあらねば、難波村のほとりに借屋ありといふを聞きて、俊平之を見に行きぬ。一町人の、女隱居とかいふもの、住み捨てたる迹なりとて、ふりたれども障子席薦の類まで、具はらずといふことなく、庭厨ともに三間ありて、浴室厠も遠からず、假染の僑居には、ここにましたる處あらじと、思へば軈て立ちかへりて、秋布によしを告ぐるに、和殿が宜しと思ひなば、わらは又何なか擇まむいづこへなりともゆくべし、といふに俊平歡びて、卯月下旬に主従二人、難波村へぞ移りける。

彼等は遂に轉宿せり。病にかゝれるさま、宿を見にゆくさま、彼を語り、之を語るも、筆端自由自在にして、少しも澁滯の痕跡なく、すら〳〵と珠玉の盤上を走るが如く、建板に水を流すが如し。

是より後も、秋布のいたづきいまだ怠られば、俊平は又醫師を易へて、療治を乞ふこと初めの如し。かくて今茲の秋のすゑより、秋布がいたづき漸く重りて、うち臥せしまゝ枕あがらず、俊平いよ〳〵驚き惑ひてひまなく之れを看護ども、さる所爲には賢ならぬ、壯佼の手ひとつにて、捗ゆくべうもあらざれば、

俊平は遂に、借屋の家主と商量して、傭婆々を置くことに決し、輪栗といへる老婆を月雇にせり。渠は相肩の棒太と呼ばるゝ、西の船場なる轎夫が母なり。波瀾は端なくも、此の老婆輪栗より起りて、一大悲慘の光景を演出せんとす讀者次號を待ち得て知りね。

（以下次號）

斧のえ（二）

松竹莊主人寄贈

荒木田麗女遺稿

又の日より、いとゞせめにせめ給へど、夜への文も御らんじいれずとあるが、いはんかたなくむねいたく、身よりあまれる思ひもつゝみかね給ふるばかりなれど、さすがに心にまかせて、こゆべき神の齋垣にもあらぬものから、春のこのめにて、つく〲となかめのみせられつゝ心地もまどふやうなり。辨がゆとにはこりすまに、文をかきつくし給へど、ゆめのしるしもなければ、せんかたなきまゝに、彼のおもかげに似かよひたる人もかなとて、我が女君の露似たまはぬさへ、つらうすくせにをしうおぼえて、さりとてもかたしろばかりの人なくやはあるとて、又この頃は、こゝかしこうかゞひありき給ふ。かゝれば、内の大殿に夜かれかさね給ふを、さすかに、いとをしう、父大臣の思しなげくらんも、心くるしければ、内よりまかづるまゝに、おはしたり。女君かきりなき、らう〲しさにて、とはぬはつらきなどおぼすけしきもなく、何でとも見しらぬさまにて、日頃のとだえなど、心にもかけたまはぬさまに、いつもおほとかなるものから、うちとけず、つゝましけなるには、男君、中々はづかしく、よのつねにうらみふすべなどし給はんよりもたちまさりてまはゆく見えにくければ、いとようまぎらはして、れいのいつこの言の葉にかとおぼゆるむかり、ことよくうらなきさまに、うちかたらひ給ふ。又の日もさすがに見すてがたくて、物いみにことつけ給ひのどかにれはすめり。内の大臣は、かくておはするをうれしきことにし給ひ、おほみきくたも

のなにやかやとあつかはしうし給ふ。御子の殿原にも、三位中將物忌とてつれしならんを、まゐりてあそびをもせられよかしとの給へば宰相侍從二所わたり給ひ、韻ふたぎなどもろともにすさみ暮し給ふ。ゆふつかたは皆たち給ふ。今日は、御簾もあげられず、外にもいで給はねは、中將、いといぶせく、つれ〳〵なる心地して、くつしいたき物思ひも、なくさめかたけれど、こなたにて、さすかに女君に所おき給ふにや。心のまゝにうちみたるゝこともなく、女房の中にたはふれごと聞え給ふこともなく、いたくまめだちて居給ふるをなま心あるこたちなどは、さうじ〳〵しくて、ねだけにしりうごつもあめり。わた殿の方によりつどひて、物語するを、君立きゝたまへど、あなたには、ゆめしらで、とり〳〵に聞ゆるは、内の大殿わたりのことにて、にひまゐりにいひきかするな

めり。殿には、姫君あまたおはしまして、おほい君と聞えさすは、麗景殿とて、内の女御にておはします。中の君は、左の大殿のうへにて、たちならぶ人なくめでたき御ありさまぞかし。小姫君と申すは、此の御前にて、これも三位の殿、さはかりたくひなき御かたちにて、さしならび給へる、御さいはひ人におとらせ給ふべきならず。乙姫君は、左の大殿の御子にならせ給ひ、春宮の御息所にて、宣耀殿に居させ給ふから、とり〳〵なる殿の御すくせこそ、めもあやに侍れといへば、又一人女御殿、みやす所てのおまへとは、上の御腹にてさへおはしませば、ことにやんごとなく御さまかたちも、いとよう似させたまひ、同じ御かほをうつさせ給ふと見るばかりの、御なまめきになんといふに、わらはの聲にて、左の大殿のうへは、こと腹におはしますや。さてなん、御かたちもか

よはせ給はぬなゝりと、さかしげなるに、民部のおもと、さかしあなたは、おとりはらそがし。母君は、宮内のすけとかやの女にて、うへの御かたに仕ふまつりしを、殿の御らんしはなたでありけるほどに、姫君生れ給ひしことよ。さてのち、すりやうすぐせありけるにや。今は常陸の介の北の方とて居給ふ。そなたにて、又女君ひとりものせしに、見おひより、左の大殿のうへに、いとようおぼえて、世にありがたきかたち人とて、介いといたうよろこびて、いつきかしつくさま、おろかならず、おとなびやくまゝに、内にやまゐらせん、君達にや奉らん、おぼろけの人にはあはせじと、心たかく思ひおきてけるとなん。この比もたしかにまねふ人ありしといへば、わらは、いでや、左の大殿のうへに似たまはんは、いとしもやんことなしや。すけ、いかに心おこりこそせめ。

いづれの君達か、むことられ給はんずると、うちわらふ。たちきゝしつる人は、いみしううれしうて、たつきある心地しつゝ、むねすこしあくやうにおぼえ給ふ。又、人の來る音すれば、のこりもゆかしけれど、見やつくるとて、たちのきたまひぬ。いつしかとかたしろの、心にかゝりていかでとのみいられ給へど、又の日は、いそぎいで給ひ我が殿にてしるべする人もやとたづね給ふ。いと時めき給ふれば、御門は、いつも市をなすばかりにて、殿人も、あまたあり、常陸の介のしる人もあり、まけも折々さふらひなどしけるにぞ、たつきありて、やがてかしこのあなはしれる人していはせ給ふ。介いとおもたゝしうめいほくありて、れぼゆるものから、ともかくも聞えさすべうもあらず。北の方は、君の花心におはするもうしろめたく、又内の大殿のうへなどの聞給はん所もびん

なく、かた〳〵思ひなやみて、たゆたふを、君、ことし〳〵しうも、人めくかなとや、やましう思すさはいへど、なき世なりせば、とか、あさはかなる人の言の葉をしんじて、あながちに、いひよるとも思ひの外に見とりしたらんをり、わが心もしりがたく、人のためも、いとをしかへいことそかしと、さすがにあやうくて、垣間見もいとゆかしけれど、さしもむね〳〵しからぬあたりに、かりにもたちやすらはんことは、人目もつゝましうさるゐなか人どもの中には、物いひあしきも、たちましりぬべく見とがむる者あらんをり、いとはしたなく、かる〳〵しきのちの名も、所せうおほすべし。此のかたには、おもからぬ心なれと、あてはかなるわたりにのみなれ給へば、世の音きゝのやさしからぬ事はせじと、さすがに、よういふかうものし給ふ。御文は、日ことにあり。御かへりは、いつもねびたる手のゆゑつきたるして、かきつるは、母北の方のさかしらなのりて見給ふにものしうせんじかきはまだならはぬものをと、めさましうはたあまりも、上すめきたりと思す。今日も、つかはしける御返りとてもてまゐれり。れいの手して

かひなしやいざら小河の淺はかに袖のみぬらす水の心よ」くやしとこそ聞侍れとあるを、こよなうも思ひあかりけりとや。やましう見給ひ、たちかへり、

そこひなき水の心も山の井のくみて見ぬ間はいかゝしるべき」うつるばかりもそめてましとて、若き人の心につくばかり、めもあやにかき給へり。

（未完）

茶話それ〴〵艸（承前）

平安 故木崎得玄述

寄稿者 孤峰庵不羨

いくにもあれ。しばし旅立ちて、數奇人を尋ねまじはるこそ、めさむる心地はすれ。めずらしき手前、いとめなれぬことのみぞ多かる。都へたより求めて、文やるに、茶器柄杓、便宜に忘るなどいひやるこそ、おかしけれ。さやうの所にてこそ、萬に心つかひせらるれ。もてる調度までも。よきはよく、茶事に功者なる人を、常よりはおかしとみゆれ。

不羨曰く、始の行旅中などにて、同じ數奇の人を尋ね、初面會し、此の人は何流にて、何程の、修業せしと云ふことも巨細には、知らざれば、めずらしく面白く、大に興あるものならん、又、先の人も尋ねられて數奇の道を以て、交際するものなれば、尋ね往し人の技量は、不レ知ものなれば、其の心互にめずらしからん。手前と雖、處替れば品替るものにて、同じ流儀とは、多少の差違あらん。都へたより求めて、便宜の節知己の人へ、茶器柄杓などおこせ、忘るなど云やることそ頼みし人は、嘸かし樂みならん。指折てまつへけれもてる調度までも、よきはよく、此の一句も中々に興あり。茶事に功者なる人を、常よりはおかしとみゆれとは、是は、茶の湯を催す時の胸中、とやかくと心配して、道具の組合懐石の調理、それ〴〵をすさまをいふなるべし。

しらせの音こそ。なまめかしく、面白けれ。大かた、物の音にはどらくはんしやう。書院につ

きて、聞たきは、樂太皷。

不美曰く、しらせの音こそ、なまめかしく面白けれと云ふ意は、中立の節、腰掛などに居てどら、くわんしやう、何をしらせに打ならんと想像する心持の樂しけを、特更にかき立たるもの也。書院に付てきゝたきは、樂太皷と云ふは、中立腰掛に衆客と、四方山の閑雅なる談話と、對句をとりて、廣々する書院に居ては、樂器太皷の音響き來らは、俗塵を拂ひ遣り、煩惱の紅塵捨出するものならん。

消息文十二種

隨菴生

(五)ふみ月ばかり筑紫より友とちの許へ

鵜殿餘野子

やう〳〵、ふく風の身にしみ侍るにも、みやこのこひしさのみ、やるかたなきに、をりをわすれぬ遠つ人も、いとゞ、もよほしがほなれば、そのつばさにも、つたへまほしうてなん。げに、去年の秋、山崎にて、わかれたてまつりし、朝霧のまよひは、今だに、かきくらすこゝちして、きのふけふとのみ、おぼえ侍るを、心づくしの月にも、はや一とせになり侍りにけり。いでや、今まで、つきの松原をだに、とはせたまはぬは、さやは、ちぎりしと心うけれど、くものうはがき、かきたつるにつけても、御ありさまの、おぼつかなくて、いと、あつかりしほども、いかに〳〵とぞ、おもひわたり侍りし。こゝにはたゞ、いまよりのちの、みとせあまりをだに、ことなく、すぐしなんほど、空ゆく月に、たのみをかけて、鏡のかみを、いのり侍りても、ふるさと人のこゝろをも、えしり侍らず。されどをさなくより、はらからのやうにて、

睦びたてまつりにしかた、さりとも、おぼしいづるをりも、などか、なからん。たゞ、めかるればうすき、うきよのさがこそは、うれたけれ。さるは、

みやこまでふきもかよはゞおもひやれこゝろづくしの袖の秋がせ

たびのすまひに、しほたれ侍るは、御おしはかりにも、なほあまりてなん。

蓮

山岡愛操

いさぎよく池の心やすみぬらむ
　濁にしまぬはなさきにけり

とは、讀人知らぬども、後葉集に載する處なり。千里の歌に、

秋近く荷花ひらくる水のうへは
　くれなゐふかく色ぞみへける

と、今年も早や半餘り過ぎて、野邊の小萩も花咲き初むる、秋の程遠からぬに、砂はこり彌や繁く、大地は、今もやくが如く、屋上の鬼瓦は、煙を吐かんばかり熱さ、此の頃も、蓮の葉の青やかに露きらゝと、玉かとばかり見え渡る、其が間より、或は眞白に、或はうす紅く、花の咲き匂ふ、池のいと涼しげなるには、人の心も、自から、澄み渡る心地こそすれ。

世の中の人の心のにごりより
　たまともみるか水花葉の露

とは、譽重の詠、三條入道は、

夕ざれば浪こす池のはちす葉に
　玉ゆりかくる風のすゞしさ

と、仲實卿は、

夏の池のはちすの露を見るからに
　こゝろぞことに涼しかりける
と、更に、明朝の申時行は、詩を賦して、
碧沼停二寒玉一。紅蕖映二緑波一。
粧凝二朝日一麗。香逐二晩風一多。
游戯金鱗出。飛揚翠羽過。
納涼依二水榭一。還續二采蓮歌一。
あはれ、水邊の高樓に登り、吹き渡る夕風のもと、馥郁たる香氣を浴びて、御空さえ行く月の光に、
　花は皆莟で月のはちすかな
と、蘭更の口吟みたる如く、滴るばかり、露と香りを含み、葉に打ちまろぶ白玉に、うつろふ影を眺めつゝ、歌など詠て樂まむには、百年の齢も、生き長へたらん、心地こそせめ。
千蔭翁の詠に
　うちよする浪かあらぬか夕風の
　吹うらかへすいとの藕花葉
と、慈鎮和尚は、
をのづから月やどるべき隈もなし
　池にはちすのはなさきにけり
と云ひ、又、崔國輔は、花の散り失せんを恐れてや、
玉淑花爭發。金塘水亂流。
相逢畏二相失一。並著採蓮舟。
とうたひ、宣長翁は又、
ちるもをしふくも涼しき夕風に
　思ひみだるゝはちす葉の露
と、盧照鄰は、更に、
浮香繞二曲岸一。圓影覆二華池一。
常恐秋風早。飄零君不レ知。
と詠じて、秋の早からんことを厭ひ、蘆庵の、
玉かとてつゝめばきえぬ蓮葉に

おくしらつゆは手もふれて見む

とは、よく赤心を寫し得たるもの哉。人は誰も珍きものには、自から、手もふれたき心地ぞする。春海翁は、

かげうつす池の鏡のきよければ
葉がくれにさく花も見えけり

と、殊に、蓮の眺は、朝こそ佳けれ、空はまだうす暗く、旭の影も山の端に登らず、霧ふかくして、晴れやらぬ頃、風清く香り床しき、池の汀にたゞずめば、妙なる香氣鼻を撲ち、俗塵頓に去りて、いつか仙境に至りたらん如く、思もはゆる哉。民子刀自の歌に、

池水のいひしらぬまでかをる也
はすの浮葉に風わたるころ

と、良臣翁は、

朝露のとくおき出でゝねやの戸を
ひらけば開く花はちすかな

と、鶴夫らしは、更に、朝まだき蓮の花の音して開く様を、詠みて、

朝まだき露ちるばかりおもはえて
一ひらひらく花はちすかな

と、猶、紀伊内侍は、

水清き池のはちすの花ざかり
この世のものとみえずも有哉

實に、此の世の者とも見えぬ迄、麗はしく、しかも、汚泥より出でながら、最、清き、櫻の艶、梅の香も、遠く及ぶべきに非ず。

いかなれや濁る水に生ひながら
蓮の花のけがれざるかむ

とは、永綠の歌、宗因は、

濁り江にひとり涼しき蓮哉

と、宗養は、

露をちて花の香重き蓮かな

と、夫れかあらぬか、昔も今も、人々の、洽く愛する處となり、歌に、詩に、俳諧に、或は、文章にも、金玉の文字など綴り、我れ劣らじと、賞めたゝゆれど、周の茂叔が、愛蓮の説の盡しえて憾みなき千古の名文には、如何でか、及ぶべき、其の文に、

水陸艸木之花可レ愛者蕃晉陶淵明獨愛レ菊自ニ李唐一來世人甚愛ニ牡丹一予獨愛下蓮之出ニ泥一而不レ染濯ニ清漣一而不レ妖中通外直不レ蔓不レ枝香遠益清亭亭淨植可ニ遠觀一而不レ可ニ褻翫上焉予謂菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也噫菊之愛陶後鮮レ有レ聞蓮之愛同レ予者何人牡丹之愛宜乎衆矣。

と、君子花の稱、蓋し之より起りたるならむ、されど、唐に、倭に、風雅人の、此の名にも厭かで池見艸、露堪艸、風露郎など、異名を負はせ、或は、藕花、水花、荷花とも云ひ、木芙蓉に花の似たるよりは、水芙蓉などゝも云ひ、又、宋の曾端伯は、名花十友を撰びて、荷花を浮友とし、張敏叔は、名花十二客を撰びて、蓮を靜客に推し、樂みたりしとぞ、三餘贅筆に見えたり。

抑、はすと云ふは、波知須の略にて、所謂、蜂窩の義、そは、蓮房を倒にすれば、恰も蜂の巣の如き形なれば、かくは名付しならむ。

蓮は水草の一種にて、池沼に生じ、春のすゑつ方、宿根より、漸く新葉を出し初め、三伏の頃、いと眞盛にて、秋より冬に渡りて、全く枯るゝ事は、言ずとも、貴孃方の、とくに、知らるゝ處、其の初めて出でし葉の、最小ければ、錢葉とは云ひ、其の次は、稍、大く水面に浮ぶものから、浮葉とも、水葉とも、又は、藕荷とも呼ぶ。これぞ、蛙

の遊び葉なる、風光の句の、
　蓮かれて蛙のしとねなかりけり
とは、餘情、深くしてめでたし、さるからに、浮葉に次で、根の節より、相對して、二つの莖の生じ、其の一つは、葉にて、莖の長く出づるものから、立葉とも芰荷とも云ふ、
　なをいとへ蓮の立葉の露だにも
　　此の世のいけは風ちらしけり
と、定家卿は詠みおかれ、宗祇は、
　露をくだき匂ひを蓮の葉風かな
と、野馬は、又、
　つゝまれて水ものびたる蓮かな
と云ひ、更に、唐土の李羣玉は、
田々八九葉。散點綠池初。
嫩碧幾平水。圓陰已蔽魚。
浮萍遮不合。弱荇繞猶疎。
半在春波底。芳心卷未舒。
と、初めは、皆卷きて、生ずれば、卷葉とは云ひ開けば葉の形圓くして、徑、尺餘にも至り、莖は葉の背の中央につきて其の中に、數多の細孔を通じ、折れば、絲を生ず、之を、藕絲と云ふも、人の能知る處ならむ。今は昔、右大臣豊成公の女、三位中將姬が、佛道に歸依するの餘り、寶龜元年七月十日、曼荼羅布を手織て、當麻寺に収めたりと言ひ傳ふ、曼荼羅布こそ、藕絲もておりたるものならめ。
其の一つは、花莖にて、花の形大く、千瓣にして、中に黃蕋多く、蓮房を圍み、色に紅白ありて、多く炎天に開く、其の花のいと淸く、妙なるよりこよなき、淸淨のものとして、昔より、蓮華座などゝ云ひ、佛の敷物にぞ用ひされる。
種好の狂歌に、

雨蛙蓮花にひよつと乘たれば
　生ばとけとや人もいはまし

など、面白き思ひつきかな。

偖て、蓮の種類と云へば、最多く、本草圖譜に載するのみにても、三十種餘りあれど、世と共に進みやすらむ、今は、増して六十餘種の、多きには至れりとぞ、其を形狀によりて、大蓮、中蓮、小蓮と別ち、大中蓮の中を、更に、白花類、紅花類、絞爪紅覆輪類などに小別し、各々、優品も少からず、先づ白花類の佳品といへば、雪白八重大輪の白天上、白黄千重細瓣の西湖蓮、白千重大輪の白萬々などにて、紅花類の絶品は、本紅八重大輪の紅天上、濃紅千重香上々の玉浦などにて、本紅千重大輪の紅萬々、これに次ぐ、絞爪紅覆輪類の天笠淵、白紅絞の抱咲、紅白絞の大輪、一天四海、肥後絞、白爪紅青絞など、皆上品として、人に稱

へらる、殊に、肥後絞は、産地肥後より名の起りたるものにて、昔、文祿年間征韓の役、驍名を八道に轟かしたる、鬼將軍加藤清正の持來りしと言ひ傳ふものから武を尙ぶ薩摩隼人の如きは、わけて愛玩すとかや。

小蓮は、名の如く、茶碗の中にても、猶よく培養し得るより、茶碗蓮とも、錢蓮とも、稱へ、白單の小輪を白茶碗といひ、本紅單の小輪を紅茶碗と呼び、花の小さき程貴しと、之等大中小蓮は、皆瓶中に入れ培養するものなれば、種類の珍奇なるを賞すれど、天然の自由を失ひて、十分なる、本色の技量を、現すこと能はざるものよりは、自然のまゝ池沼に生ふる、普通の、紅白蓮こそ、亭々として咲き出で、芳香四邊に遍くして、床しきはなけれ。そが、名所とし言へた、不忍の池を初として、山城大津の池、大和菅田の池、同じく劒の池

攝津の住吉、河内の日下江など、いと名高し、又尾張の津島、埼玉の舍人邊に行きて觀れば、到處の田間に咲匂ふ、蓮の得ならぬ、風情あり。

今、東京市にて、食用としつゝある、蓮根の多は、埼玉の舍人、及、上總下總より出づ、其の質堅く、嚙むに音するは、上總、下總の產なりと。

支那產の蓮に、二種ありて、一つは、蓮根を食ふを主とす、其の質、柔にして、且つ甘く、餅蓮の稱あり、近頃、盛に培養せらる、其の一つは、實を食ふを主とし、支那にては、之を砂糖漬とし或は、藕子湯とて、實を五六粒煎りて、茶碗に入れ、湯をさして食ふに、風味いと美なりとか、又、蓮根をおろし粉にして、乾し、恰も、我が、葛粉の如く、之を藕粉といひ、味亦佳なりとぞ。

實は、一蓮房に、大凡、十粒内外づゝ結び、形楕圓にして、外皮は薄黑けれど、仁は白く、味淡甘なり。又蓮根は、蔬とし上品なるものなり、總じて、紅蓮の根は、肥大にして、黑みあれど味よろしく、白蓮は、細くして白く、味、又、紅蓮に劣るとかや。

古き文に、ものゝあはれは、秋こそまされとあるは、いと盛りなるものゝ、秋風につれて、枯れうする寂さを、心憂しとて云ひたるならむ。されどにや、

君子とも呼れし花の蓮の葉に
誰かは味噌をつゝみ初めしぞ

と、貞古の狂歌に見えし如く、蓮の青葉も夏の頃は、立葉とか、浮葉とか、或は、新荷とも、荷葉とも、人每に稱へられたるものゝ、秋となり、枯ての後は、味噌など包まるゝ迄に、至りたるとは、最もあはれなる、されど包みたる味噌の香り高く、其の葉の枯ても、猶、本來の面目を、失せ

ぬこそ、君子の君子たるおも影の存せられて、いよゝ芽出度けれ。

綠陰小話

三石直子

家事のいそがしかりしにて、例の拙きすさびをさへ、いと長う怠り侍りぬ。さても、年月のすぎゆく勢こそすさまじけれ。昔の人の、昨日こそ早苗とりしか何時の間にと驚きけむ、實に、愚しき心にも、はた、今更に驚かるゝよ。人々の花を待ち、散るを惜みしは、昨日とだにも思はれぬを、今は、その疎ましかりし青葉のかげを頼みて、辛くも夕風を待ちつくるころとなりぬ。おもへば、短からぬ、この間に、何事をか爲し得たる。世の事になど言だてすべきことをか

おのが上をば顧みよかしと、さすがに耻ぢかはしかれど、例のと人もゆるし玉ふらむか。綠陰小話と眞字ばかりを列ねつる、納言のおもとの在しけむには、惡きものゝ中には數まへられけむよ。

久しう遇はざりける友の、ゆくりなくも訪ひ來ましゝが御坐しき。いざとて、前栽の木かげにすゑたる凉臺に請じ、何事となく以來のことを語りあひき。男の方々ならましかば、清談に時をうつしきなど物し玉ふらむ。さるすが〳〵しき方の談もなく〳〵て、たゞ、わが思へることどもを聞えたるなむ、此上なき心やりにはありける。其の折のわが談をば、綠陰小話となづけて、かく書い散したるなり。かの君の談は、別に記し試みたれど、いまだ、御許を得たらねば、ほしいまゝに、公にもしがたし。

輕薄

手を覆せば雲、また、たちまちに雨。人は皆かく輕薄なるものなりき、内外東西の別なく、而かも、幾百年の往昔より、言ひ舊したる俚諺を、文明と稱する現代に至るまで、猶、いまだ、之を否定する能はざるは如何なればぞ。うたて口惜しきかぎりならずや。

文明の眞髓

或は曰はく、人間世界の進歩發達と稱するものは人々をして、たゞ、巧智にのみ長ぜしむるの謂なるが故に、古來の、所謂仁義道德と、必ずしも、行爲の一致を求むるを要せず。社會の風潮の純潔なると、腐敗せるとを問はず、總べて、當時の多數に容認せられ、或は、容認せらるゝに至らざるも、著しき非難攻撃を受けざる以上は、如何なる非行といへども、之を敢へてすることを妨げず。甞つて、何者か公にせし、彼の陶摸公許論の如き、即ち、最も、よく、文明の眞髓を得たるものなりと。

闇黑なる文明

或人の言へるもの、果して、理に適へるか。世の人の大方は、皆之を然りといふ。然れども、説くところの如くんば、進歩發達と稱するものは、人類に光明を與へ、是を幸福安寧の地に導くものにあらずして、寧ろ、之を闇黑に陷れ、困頓窮乏の間に沈淪せしめむとするものゝ如し。闇黑なる方に進歩發達すといふ。世間、果して、斯くの如き不論理なる言語の存在をゆるすべきか。

名實

要するに、現今の人は、其の名をもとむるに急にして、其の實を究むることを爲さるの弊風を、いまだ、全く蟬脫する能はざるなり。維新以來、既

に三十有餘年。猶、この弊風を存ずるに至りては所謂文明國の名にかへりみて赧然たらざるを得んや。

（未完）



一葉の舟

白松園主人

この頃、郷里なる樋野川に、友とする人ひとりふたりと共に、一葉の扁舟を浮ぶる事あり。時はふみ月廿日あまりのことなれば、さらでも流汗玉を漲らすもなかなるに、晴れたる空は塵ばかりの雲だにた丶す、假初に吹きくる風は、ぬる湯を浴びるに似て、蟬の鳴く音はた汗催はしがほなり。

水の上はさすがに涼やかにて、緑波鏡の如く、向上れば石壺山上蒼然として松柏參差す、屋形舟のうち晴風に横臥して、此の景をながむれば、栩々然として胡蝶になるの概あり。こぞの此の頃は、學友と平安の幽邃を探り、ことしの今日は、郷友と樋野の河源に遡る。趣味ある此の清遊、陶然として醉ふに酒あり。肴はたいづくにか求むる。舟子は頻りに網を投じてあざらけきを物す。其の魚何ぞ鮒鯰鯔竹筴魚の類なり。釣して網せずといふ、君子にはあらねど、釣らんはなか〳〵に興あるべしといへば、舟子は唯々として、直ちに綸を垂れしに、色白き鮠を見るまに五六十尾釣り上げたり。その余りに面白さに、おのれもと立ち上りて、糸を垂る丶に、あからさまにも食ひつかず、たま〳〵浮標を動かす折は、余りに急焦りて、忘る丶ばかりにはねあぐれば、糸

は忽地ふつと切れ、衆皆得耐へでどづと笑ふ。人の境を犯せる罪なり。

此の川の上に架せる東津橋、長さ七十八間、白帆風を孕みて、秋穂の浦より入り來る者、前後相望み、絶えず、此の橋下に碇舶す。想ひ起す十余年前、おのれは常に、此の橋を通ひて、堤を下ること遙にして、老松の聳ゆるあなたに、書を學びに行きたりしことを。今は山陽鐵道延長して、此處は馬關山口の衝路なればとて、停車場を建つる最中なり。鐵橋も半成りたり。鉄路轟々、直ちに文明を、此の粟土邊境に傳ふる如く、世は進化し來りしなり。うれしさかも。

葦わけ小舟、名のみ殘りて、兼葭刈り盡され、櫓械にさはる者もなく、げにや形容詞一變の時代は來りぬ。此の山村水廓をして、商工軒を並ぶる、熱閙繁華の競爭場裡たらしむるも、益々、此の川に望みあり。只恨むらくは漁笛は滊笛に壓せられ石壺山上の月は、烟突のけぶりに掩はれ、貨物運送の船は、流を塡めて、吾徒をして沒趣味を歎ぜしむる事を。

且つ飲み、且つ歌ひ、一年の欝を半日に消する心地して、のぼり下りするほどに、日は沈みて、金波動かず、月猶ほそければ、紙燈を舷に連ね、はの醉ひたる衿のあたりを、夕風の、そと通ひたるもうれしきに、橋邊の樓上幽に風鈴の漏れたるも、云はんかたなくうれし。

消夏の料

黄口孺子

△はなく\しき不敬　ブルガリアの一新聞記者サンゴップといふ人、先頃、一冊子を著し、鼻と人物との關係を論じて、隆鼻の人の性格は如何だの、

低き鼻の人は如何な性情を有つてをるの、イヤ獅子鼻はの、また、鷲鼻はのなど種々記述した後に、一般に長鼻もつてをるものは、惡人だと結論した。ところが、同國にはフエルヂナインド親王といふ有名の鼻長が御座る。同國裁判所檢事閣下は、即ち、この論を以つて不敬と認め告訴した爲に、サンゴツプ先生、到々三日の禁錮に處せられたさうな。これらをや、はな〲しき不敬とは申すべからむかなでござるて。

△厚情に堪へかね候　南阿戰爭のために、戰死した者の遺族を救護扶助せうといふので、倫敦市長の募集した義捐金は、はやくも、數千萬圓に達したさうなが、この戰爭が、英國人の愛國心を喚起勃興させたことは、非常なものだといふことである。すでに、多數の貴婦人達は、看護婦を志願して從軍して居る。が、大抵皆全くの素人方のこと故、已が心のまゝに、あまり世話をやきすぎる。傷さに苦んで呻吟つて居るのでも、何でも、間がな隙がな、如何だ斯様だと問ひなぐさめるをば決して怠らない。一々の返答御禮、負傷者にとりては、中々堪へられぬことである。すぎたるは、猶、およばざるが如しですな。ゴルドン隊の一士官が、負傷した時、遂に、これら篤志看護婦達の厚情に堪へかねて、其の枕元に斯様いふ掲示を出したといふことである。

一拙者儀、重傷にて頗る衰弱いたし居り候間
トテモ看護を受くる力これなく候。

本國をいでゝ、數千萬里の異域にさまよひ、かよわき身ながら國家のために盡さうといふ熱誠も、時には、斯様あだとなることがある。何にしてもかねてからの心がけが肝要である。

△家即ち市　墺地利維納の近郊にある自由の家と

いふが、世界最大の家屋であらうといふとである。小室の數が一千五百箇、大室の數が四百箇、中庭が十三箇あるさうだ。其處に巨多の家族が住居してをる狀態は、さながら、一の市をなして居るといふことである。

△看板の大さ　東京で看板の大いのが、葬儀社のであらう。何處の葬儀社でも、看板のために家根が見えないやうになつて居る。近頃、何んとやらいふ煙草屋では大分、大い看板を出すさうだが、まづ、世界、第一の大看板ば、亞弗利加の北西カナリア島の沖合に立てられた者だらうといふことである。文字ひとつの大さが、橫十五呎、縱三十呎のものを以つて、カナリア工業商會と記されてある。其の板の長さ七百五十呎、海面を拔くこと數百呎の上に揭げられてあるさうな。

△ついでに　世界最深　穴を紹介せう。其は獨逸カットシャウ附近のシユウーデパツハといふ地にあつて、深さ五千七百三十五呎あるさうな。元來、地質學研究のために廿年前に穿ちはじめ、六年經つてこの深さに達したといふことだが、この上は、最早、人の力では穿つことが出來ぬといふて、中止したといふことである。



お月さま

さいぐさ

かきくらしたる　さみだれの
くものなごりも　とゞめずて
ぬぐへるごとき　大ぞらに
月のかほばせ　めづらしや

* * * * * *

雨におきたる　をさな子に

そゝのかれて　いでたてば
吾(わ)が身(み)に似(に)たる　人(ひと)のかげ
あやしと空(そら)を　あふぎみて
「オトーシヤン。アエ、ナーニ。」
「アレハ、オツキサマ。」
「オチユキシヤマー。アエ、ホチー。トッテ
チヨーダイ。」
をさなきものゝ　まなこにも
うつるかきよき　月(つき)のかげ
はしとまでいふ　こゝろねは
めでのすさびか　たはむれか
「ヨー。トッテチヨーダイヨー。」
「ソレデモ、オマエ、アレガ、ドーシテ。」



「ウーン。トッテヨー。」
さるざれことは　せぬものと
よろしきさまに　あしらふを
なほまことしく　せめはたる
こゝろのそこの　知(し)られねば
「オマエハ、マタ、アレヲ、ナニニスルノ。」
「アエハ、オシエンベイダカヤ、タベユノー。」
をさなごゝろに　ふさはしく
見(み)たてたりやな　さるにても
くふとはおにか　おそろしの
子(こ)ざとや月(つき)も　おもひけむ

＊＊＊＊＊＊

うるはしかりし　かはばせに
たちまちおほふ　くものそで





おのがいる手の
やまさして
たゞあしはやに
わたりゆく

「アエ。オチユキシヤマガ、カクエデ、ニゲテイク。」

薬師の縁日

清渓

昨年の夏の事にてありき。ある夕つかた所用ありて、本郷龍岡町の邊に至りしに、此の日は、わけて賑々しく、人の往來もたゞならねば、何事ぞとゝふに、薬師の縁日なりといふ。實にもと思ひて、さらば參詣せんと、そなた樣に歩むに、多くの露店ありて、樣々の品物を販けり。古手古道具はもとより、日用の家具飲食品または、玩弄品までうるさき程に列ねてあり、中にもうれしきは、樣樣の草花を販けるにてありき。數多の鉢に、種種の花を栽ゑ、滴るまで、水を灌ぎたれば見るも涼しき心地す。紅白の大きなる花さけるは、夏菊なるべし。さゝやかなる細き葉に、やさしき花のいろ〳〵咲けるは、石竹にやあらん。白薔薇葵なども、また捨がたき風情あり。石菖垣衣などの露の玉はしらせたるは、わけて凉しげなり。いでや、一鉢買はゞやと思ひつゝ、紫の色こき細やかなる花をさして、あれは何といふぞと問ふにロベリヤとなん答ふ。こなたのはといへば、そは美女櫻なりといふ。名の面白さに價をとらして、一鉢を求めぬ。

やがて薬師の門前に近づきしに、人々ひしと集ひ

居て、進むべくもあらざれば、こゝには入らで、大學の方へと進み、赤門前の邊に至しに道の傍に人の多く立とまれるあり。何事ぞと、己も立よりて見れば、いやしげなる單衣を着たる五十餘歳の老婦と、十四五歳の少女とあり。道に莚をのべて、破れたる毛布をしきて、小さき洋燈を据ゑ、筆を執りて、何やらん認めつゝあり。傍に歌は一枚五錢發句は二錢と書きたる、小さき札を立てたり。短冊は、至て麁末なれど、筆跡は。いとうるはし。やがて、すら〳〵と書き流ししを見れば述懐と題して、

　櫻花ちりにし後は世の人の
　　木蔭をよそに見るぞ悲しき

また老鶯と題して

　きけばまた是は珍らし夏山の
　　青葉がくれのうぐひすの聲

今一つ

　無き人の露と消にし跡とへど
　　尾花が袖に風かほるなり

少女が發句に

　暑き日や砂にこげつく水の泡
　花ならばぬれても見むに月の雨
　風涼し青葉の上に不二の雪

歌には

　世の中の人の心を紫陽花の
　　うつろふ花の色に見るかな

これも筆の運び拙からず。歌は、人の句かしらざれど、いまだきゝしこともなければ、自作なるべし。よき句とも覺えねども、いやしき身の、かくもやさしき言をつらねたるを見て、覺えず、憐を催しぬ。

今日の暑さのいとゞ堪へがたきに、かく人々のつ

どふことゝて、汗も流るゝばかりなるに、行儀、正しく坐りて、少しも亂れたる有樣なきに、何となくめかしくて、身の上をも尋ねきかまほしと思ひつれど、人のわやしまんことのうるさければ、そのまゝに、暫時佇みたるに、後より輕く、我肩をたゝくものあり、顧みれば、學友某が驚かせるにてありき。心に殘れど友の誘ふまに〳〵歩を移しぬ。

少女が句は、なほあまたありけれど、みな忘れて記臆せず。あはれ、彼等は、如何なる人の落魂しにやあらん。さりぬべき、人の、世に幸なくて、かゝる業して、糊口をなすにやあらん。あなあはれ、後に人の語るをきゝしに、彼等は、本郷か小石川あたりのさる寺院に寄寓せるものにて、かく方々の緣日などにいづるなり。生れは會津の士族なりとかいへり。それ誠なるべし。彼の擧止の何となく卑しからぬ風ありしものを。

予は、この兩人の事何となく心にかゝりければ、其の後緣日毎に、あまたゝび、此のあたりを往來して、かの人々やあると、心をとゞめしかど、かつて、二たび見ることはなかりき。

方言集（一）

二三年前から、この方言を集めることが、方々の雜誌で流行してをる。が集め方のわるいために、たゞ一時のなぐさみに止まつて、學者の參考に資するといふまでには至らぬ樣である。のみならず、中には、往々、間違つたことを出したり、曖昧なならべかたをしたりなどして、讀者に興感を與へる代に苦痛と不愉快とを感じさせる樣の事が多かつたかに覺ゆる。其故、本社

では、強ひて、之を諸媛に求めなかたのである。ところが、諸媛の中には、しきりに方言蒐集のことを慫慂おこす方もあり、方言を寄せられる方もある。折角の希望であるによつて、これから、この欄の一二頁を割愛する心算である。諸媛も亦、ひま〳〵には、其の地どころのものを寄せらんよ。

秋田市方言

秋田市楢山裏町　湊　はつ子

をなご(女)　わかば又ばこ(赤子)
おね(女中)　でやく(大工)
まなぐ(眼)　まよぢ(眉)
なづき(額)　はたば(頬)
あくと(踵)　まま(飯)
ねんぎ(神官)　けうむし(毛虫)
べこ(牛)　でやどこ(臺所)
ゆるり(爐)　たんご(水桶)
けんざ(蜻蛉)　きや(貝)
かさつぶれ(蝸牛)　めんけ(可愛)
れさらばい又あばい(左樣ナラ)
のんのん又ちやちやと(早ク)



庭梅雨　東久世通禧

はらはさる苔路の塵もさみだれに
流れてきよきにはのおもかな

梅雨晴　鍋島直大

蟬のなく聲きこゆなりなこりなく
はれ渡りけんさみだれのそら

市中梅雨　大谷光尊

梅雨のふりつゝきたるこのころは
いつくの市もさびしかりけり

暮行く空に月出たり　竹屋光昭

暮かゝる空なかむれはくも間より
もれ出る月のこゝちよきかな

海邊夏月　前田利昭

島やまの松をはなれてすみのぼる
なみ間の月はなつとしもなし

曉露　宮地嚴夫

朝顔もまたさきいてぬあかつきに
まつこそにほへ露のしらたま

張良　北郷久政

履をしも捧げざりせばくらゐやま
いかて高峯にたちのぼるへき

藤原百川公　植松有經

千年へし相樂のはかもあらはれぬ
うつもれぬものは誠なりけり

不二山　岩崎勝從

駿河なるふしの高ねにうこきなき
みよのすかたのあふかるゝ哉

をりにふれたる　岡部讓

經いとのみたれてやれしからころも
ぬひてやゝらむうちやすてまし

石川丈山　蜂須賀隨子

渡らしのこゝろ深さはなみならぬ
せみの小川をくみてこそしれ

夕梅雨　鍋島榮子

夕日かけさすかと見れはうき雲の
またかきくらすさみたれの空

瞿麥　前田朗子

うつくしくさきしまかきの瞿麥の
かさしのたまとおけるしら露

朝梅雨　南郷柳子

朝日影さすかにそれとみえながら
くも晴やらぬさみたれのそら

國旗　柳原愛子

天さかるひなの果まであまつ日の
み旗かゝけてあふく御代かな

和布刈　小池道子

波の上に松のはかけのかゝやきぬ
みやつこ今かわかめかるらん

夏夜雨　北島以登子

夕立のあめはおとなくはれゆきて
かせのみ殘る夜半のすゝしさ

夏草の中に百合咲けり　日野西廣子

あけまきに刈殘されてなつの野に
二もと三もと百合さきにけり

かはほりとふ　中島歌子

かはほりのとふ夕暮になりにけり
友をやとはんすゝみかてらに

あやめ一もと　河村重子

藤なみのゆかりおほえて涼しくも
かほりそめたる花あやめかな

稻毛日記　石榑千亦

塵ひぢのたゞよふ都よそにして　寅治
世をすね人の鄙にこゝろざす　千亦

こは滊車の中に於ける連歌の一首にして、又實に今日の一行の心なりけり。月は六月、日は十日の午前十時といふに、本所停車場に集ひぬ。男五人

女一人、男は竹柏園のあるじをはじめとして、竹柏會員なる小花、横山、清水の四人の君とおのれとにして、女は奥村ぬしなり。

奥村ぬしは早くより竹柏園を立ならさる丶人にして、郷里をいで丶、こ丶に二十年の久しき星霜を東のみ里に過されしが、こたび其故郷人の請もだしがたくて、紀伊國東牟婁郡音にきこゆる那智の瀧のほとり那智村に立歸らるべく、其日さへ近づきければ、日比親しう交らふ人のこれかれ、おくりのうたげせむとするに、都にては事ふりにたりいでや稻毛なる海氣館にてと志ざすなりけり。されど其日の定まりしがあまりに急なりしによりて、來つどふ人の少なかりしは、會の爲め大方幹となり根となりて働かれしぬしのため、いとほしくはた口をしからぬかは。多きよりも心そろひてなどいふ人もあれど、そは全く負けじ魂のいはしむる詞ならし。ことに清水ぬしはゆくりなく陸前の國より京に出られ、始ての中らひなるを、共にともに出たゝす 志嬉しけれど、そもさはる事ありて、ゆく處まではえゆかず、船橋までおくりゆきて、引かへし、上りの滊車にて歸らむといふを、人みな口をしがりぬ。されど是は已むを得ぬことのあればなりけり。さるにてもきし子ぬしは中々にこの少なき人のこゝろざしのほどを汲しりて、いとうれしとおぼすらかし。そのうた

わかれては疎くなるてふ言のはを
　いつはりごとゝなす由もがな

春秋にあそびなれつるともどちを
　ひとりわかれてけふや歸らむ

那智山の瀧のしらいとくりかへし
　みやこの友をこひやわたらむ

何事も見ざるきかざるみくまの丶

山のさるにもわれならむとす

皆人あはれがりつゝ滊車にのりぬ。けふしも日曜日のことゝて、人あまた打のりて所せかりしとはいへ、この心あひの友は一つ車に膝をつらねて、打くつろぎつゝ談らふことをえしは、何よりもおもしろかりき。乗るやがて鉛筆と紙とをとういで連歌連句に隙なき、はたおもしろき一つなりき。乗合へる人たちの、わがことを品さだめするにはあらじかと、目耳そばだつるも、はたおもしろからじやは。

停車場をいつれど、橿桑の木などを植まはせる苗代田、水田、くさ〴〵の木をつくりて垣となせる家、黄ばみたる麥の畑、さきのこりたる菜の花の畑、白帆つゞける川、緑にもれる杜、走馬燈のやうにめぐり〳〵てゆく。編笠菅笠などきたる男女を見て、詩的なりとわれらはおもへり。かれらはたわれらを見て、畫の如しとや思ふ覽。

幼くて八犬傳によみたりし　信綱
　その山かあれその川かあれ　貞三

三熊野の浦わのあまに成ぬとも　岸子
　花の都の友はわすれじ　碩

瀞八丁沖の橋杭那智の瀧　千亦
　われしるべせむ來ませ我友　寅治

繪具皿小包にしてとく送れ　貞三
　梢みどりに麥黄ばみたり　信綱

藁葺の(碩)並びたちたる(千)山里に(岸)
　我も一つの(貞)藁屋つくらむ(信)

連歌連句頻りなる中に、奥村ぬしの別をしまれて、更によめる歌、はた返しせむとて人々のよめる、殊にあはれふかし。

文の上に相しれる友にけふあひて
　やがて別れむ今日の圓居か　寅治

鯨とる熊野の浦の浦人が
よわたる樣を來て見ませ君　岸子

時しあらばゆかまくぞ思ふ鯨とる
熊野の浦に君すむといへば　碩

かりそめの別と思へどみくまのは
海山とほしいつかあひ見む　岸子

路こそは千里八千里ありといへど
こゝろ隔てむ海山はあらじ　寅治

願はくはかはらぬ君を又も見む
今日の笑顔をその儘にして　貞三

來な、稲毛すぐる迄もくなと祈りし船橋につきぬ清水ぬし、用早く終らば又後よりおひしかむとゝひつゝ下りぬ。今樣六歌仙の一歌仙こゝよりかけぬ。



雜報

●御精勵　天皇陛下の、常に、深く、内外の政務に大御心を寄せさせ玉ふは、今更、記し奉るも愚かなれど、陛下には、昨今、暑中炎熱堪へ難きにも拘らせ玉はず、毎日、午前十時ごろより、御正服にて御學問所に出御、清國事變其の他に關する衆多の電報、若くは、各省よりの奏上書類等を親しく御裁斷あらせらるゝ由。漏れ承はるも、畏き事の限りにこそ。

●御避暑中の東宮　日光御用邸に御避暑中の皇太子殿下、同妃殿下、並に、常宮周宮両殿下は至極、御壯健に渉らせられ、特に、東宮殿下は、

御体量も日々に增させられ、同地の氣候最も適當せし如く、拜し參らると承りぬ。又、近日中に、供奉員及び同地滯在中の各國公使等に、御陪食仰付けらるゝ御都合の由。

●再度の御慰問　天津陷落の役に負傷せし、在北京佛國公使館附武官、並びに、同國負傷兵十數名、新たに我が國に護送せられ、廣島豫備病院へ收容せられたるを以て、曩に、傷病兵慰問使として差遣せられたる山川御用掛は、去にし日吳病院を慰問し、翌々日、廣島に引返して、新來の患者を慰問する旨、其の筋へ電報ありたりと。

●佛國負傷兵の感泣　我が國剳駐佛國公使館附武官男爵コルザヒー、書記ギンヤンの兩氏は、去日、宮内省に出頭し、曩に、天皇皇后兩陛下より慰問使を差遣はされ、同國軍人の傷病者を御慰問あらせられ、且つ、恩賜の御物等ありし御禮申上たりと。兩氏の言ふ所に據れば、傷病者は、孰れも、聖恩の優渥なるに感泣して、身の苦痛をも打ち忘れ、全快の上は、日本語にて、御禮申上げんものと、覺束なくも、見廻りの醫師、若くは、附添ひの看護婦に就きて、日本語を練習しつゝありと。其の他、病院の取扱ひに就きても、醫師看護婦の親切なるに感じ、身は萬里の他鄉に在りながら、更に、故國に變る事なしと語り出でたる由。あはれ、御稜威の程こそ最も畏しけれ。

●海軍恤兵部の新設　海軍省に於いて、恤兵部を置設することに付いては、過般來、詮議中なりしが、其の取調も、畧ば結了したるを以て、近日中には、海軍省告示として、發表せらるゝならんと云ふ。

●日本郵船會社の恤兵品寄贈　去にし八日手拭二萬五千筋を淸國派遣の陸軍々隊へ、一萬二千筋

を同海軍艦隊へ、コンデンスミルク二百打を目下入院中の陸軍傷病者に、八十二打を同海軍傷病者へ、各寄贈したき旨、陸海軍兩大臣へ願出でたる由。

●恤兵寄贈者の注意　北清派遣の軍人軍屬に、恤兵のため寄贈すべき物品、及び、其の數量は、荷上の都合を圖り、單位を定めたるものにして、夫より小數の物品は、陸軍省にて承認せずとの事なれば、寄贈者は能く注意すべし。因に、恤兵金告示發表當日より、續々願出あり。平均一日三四人以上なりと云ふ。

●負傷者の慘狀　赤十字社の病院船博愛丸は、先頃、太沽より、負傷者及び病者百六十三人(内佛國兵三十人を)載せ、第一回の輸送を爲し、目下、廣島豫備病院にて治療中なるが、負傷者の船中にありしときの模樣を實見したる人の話に依るに、負傷者は、總て、重傷者のみにて、患者は重に赤痢病なりき。負傷は、孰れも、慘狀を極めたるが中に、一人の佛國人の如きは、船の前部ハッチに横臥し、最も苦悶し居る體、目も當てられず。其の兵士は彈丸の爲め大腸を貫通され、大便脊部に排出し、命脈、旦夕に迫まれる有樣、實に、悲痛の至りにして、此の外、或は肩骨を擊たれ、或は手足を打貫かれたるものある等、何れも傷痍の爲めに、苦痛を極め居る樣、宛然一幅の修羅場を現出せるもの丶如く、如何に、聯合軍の苦戰したるかを想像するに餘りあり。傷病者は、醫師の施術及び看護婦等の懇なる看護に依り、乘船當時よりは、大に苦痛薄らぎ、多少元氣を回復したれども太沽に於いて收容の當時、甚しきは傷所已に炎熱の爲に腐爛し、蛆を生ぜしものあり。慘の最も慘たるものなり。又、横臥せるまゝ、其の頭を擡

げ得ざるものあり。到底、何れも回復覺束なしと思はるもの多しと云ふ。又、外國人負傷者は、多くは砲彈片を受け、邦人の負傷者は、重に、銃彈丸を蒙れりと云ふ。外國人は、遠攻をなしつゝありたるにも拘らず、本邦人は、肉薄して奮闘したるに依るなるべし。赤十字社々員は、患者の陸揚準備の爲め、頗る繁忙を極め、時々飲食を欠き、他を顧る遑なく、看護婦の如きは、船暈の爲め、何れも、半病人の体なるにも拘らず、嘔吐しつゝある傷病者を勞はり、看護に餘念なく、各々特有の手腕を揮ひ、介抱する樣、懇切周到、親戚故舊も、又、及ばざる所あり。誠に、殊勝の動振にして見る人孰れも感激せざるはなしと。又、廣島豫備病院に、内外國傷病兵治療の模樣を實見したる人の話に依れば、外國兵は、重輕傷に拘らず、繃帶なども厭ひ、甚だ、苦痛に惱むの風あり。特に、無教育のものは、最も甚しく、泣いて、軍醫の治療を避けんとするものあり。去れど、看護婦の傍にありて之を介抱するは、忍耐して、厭々之に堪ふるもの如くなれど我が兵は、平氣にて、寧ろ、面白半分に治療を受くる如し。其の重傷者にして、一刀兩斷の施術を與へ、生死計られざるも精神自若目を閉ぢ、晏然として治療を受くるを以て、彼我兵士の性情を察するに足るべし云々と。

●紀念美術館の位置　東宮御慶事奉祝會の献納美術館の位置は、上野、日比谷の内を選定することに決し、爾來、其の設計と共に、協議しつゝありしが、先づ、日比谷に内定し居る由にて、近々發表するに至るべしと。

●ベルツ博士　本邦醫界の崇敬を受けたるベルツ博士は、今回一ヶ年の見込を以て、賜暇歸國するに付きては、畏き邊りにても、博士のことゝて

暑氣激烈の折柄なるに拘はらず、特別の御沙汰を以て、去にし十五日、特に、謁見を賜はりたりとぞ。

●第一軍戰死者紀念碑　日清戰役後、野津、桂、奧、小川、黑田、矢吹等の將官、委員となりて、第一軍戰死者紀念碑を、名古屋に建設するの企ある由は、曾て記したるが、該碑は、總高さ六丈に亘り上部に彈丸を据ゑて、下に、第一軍戰死者紀念碑といへる金文字を鑄出し、周圍に、戰死者の姓名を顯はす。今回砲兵工廠に於いて鑄造濟となりたれば、目下、名古屋郵船會社の船便にて、同地へ運搬中なりと。

●故後藤伯の銅像　故後藤二象郎伯の銅像を、京都東山公園に建設するの企ありとは、豫て、聞く所なりしが、其の高さは一丈に近く、美術學校卒業生吉本辰吉氏は、高知縣出身の縁故を以て、該原型の製作に從事し、目下、過半出來せる由。

●巴里博覽會總裁以下へ勳章贈與の議　巴里萬國博覽會總裁ピカール氏以下、事務總長、其の他重なる人々へ、我が帝國勳章を贈與するの議は、先般、林事務官長より、曾禰總裁へ内申ありたる由なるを以て、遠からず、其の運に至るべしと。

●夏期休業中の心得　（佐々魯水氏報）

近ごろよき思ひつきなり。ひとり、休業中にのみ之を適用せず、世の父兄たる人は、四時、注意して這般の注意を實行せしむることにつとめらるべきなり。

夏期三十日間全く休業するは其目的兒童の疲勞を醫して健康を全うするにあり然るに此長日子間唯兒童隨意の行動に放任せば自然學校の教訓も等閑に流れ撫養の法其宜を得ざるが如きことこれなしとも保し難き義に付兒童の心得べき要項左記の通り印刷配付致候條家庭に於て此主旨により充分御教訓相成度候也

明治三十三年七月　菊池高等小學校

一、衞生に關する注意

一、毎朝早く起きて顔をあらひ口をそゝぎ女子は髪を梳るべし

一、食物をよくかみこなし冷過ぎたるもの又は極めて熱きものを用ゆべからず

一、食事の前後は劇しき運動をなすべからず

一、夜分は早く寝につき十分に睡眠すべしされど食事をなして直に寝るはよろしからず

一、寝る時は寝衣又は胸當にて腹部を覆ふべし

一、不消化物臭味を生じたるもの未熟の果實を食すべからず

一、煮沸したる水にあらざれば飲むべからず

一、間食をなさゞるやうにし食物の分量と時間は規則正しくすべし

一、病氣のきざしあるときは父母に告げ成るべく早く醫師の診察を受くべし

一、室内は空氣のよく通ふやうにすべし

一、夜具は時々日光に曝し衣服は垢のつかぬものを用ゆべし

一、水泳は一回貳拾分を過ぎざる様にし一日二回より多くすべからず

二、復習の心得

一、復習は成るべく朝の時になすべし日暮に讀書習字などはよろしからず

一、机によりて坐するときは窓若くは燈火は左方にあるやうにすべし

一、書籍紙類は正しく之を机上に置くべし讀書のときは両手にさゝげ字を寫す時は机を近く引寄せ胸を机におしあてざる様にすべし

三、往來の途上に於ける注意

一、軍隊又は葬儀の列をよこぎるべからず

一、老人不具者又は重き荷物を持ちたるものには道を譲るべし

一、通行人を冷評し又は無禮のふるまひなどなすべからず

一、運動遊戯の爲他に出るときは父母の許しを受くべし

一、建造物を毀損し又は樂書などなすべからず

一、危險又は通行人の妨をなす遊戯をなすべからず

一、途上無益に時を費し店前の商品に觸り又は買食をなすべからず

一、異様の服装をなし又は裸體にて途上を通行すべからず

四、家事手傳に關する事

一、夜具の出入家の内外の掃除其外父母より命せられたる用をたすくべし

一、學校にて習ひたることは家庭に於て實際に應用する様心掛くべし

一、家業の見習をも心掛け女子は炊事洗濯裁縫の手傳をなすべし

五、家族の親みをあつくすべし

一、父母長上の命に從ひ弟妹を愛撫すべし

一、父母の許しを受けずして他家に宿泊すべからず
一、家族に病人あるときは懇切に看護すべし
一、祭會には祖先の墓所に參詣して恭しく敬意を表すべし

●游泳の價値　と題して兒童研究に記載せるもの、時節がら、諸孃にも示さんとて、こゝに轉載しつ。みづからのためのみならず、いとしき弟妹のためにも一讀の勞をな惜みたまひそ。

夏季は、最も、游泳に適したるの時機なり。而して兒童等は、多く游泳を好むものなれば、之を奨勵して、教師ある所ならば、之に就きて學ばしむるを可とす。今、游泳の價値に就きて考ふるに、固より種種あれども、身体上の衛生に關して二種あり。

第一は、皮膚を堅固にすることなり。皮膚の堅固なることの、身躰に必要なることは、明白にして、殆んど、諸病の誘因となるべき感冒に罹ることを防ぐに足るなり。即ち、氣候の激變にも抵抗し得るなり。第二は、完全なる運動にして、身躰諸部の筋肉をして、悉く活動せしむることとなり。游泳によりて、身躰の運動を爲すときは筋肉強健となり。且つ、食物の消化宜しきを以て、胃腸を健全ならしむるなり。此の如く、游泳は、二重の利益あるに、尚は、其の術は、實際に必要なることと屢々なり。即ち、兵役に從事したる際は云はざるも、水難に遭遇せる際などの不意の災害に於いて、如何に其の身躰を保護し、生命を保護し得ることは、亦、言ふを待たざるべし。我が國民は、世界の國民として活動すべきを以て、平和の時と雖も、猶は、且つ、游泳術の必要あれども、目下の如し、東洋の一大波瀾を生せるが如き時には、亦、最も必要なり。大波一度起りて小波起り、小波漸く多かるべきは、理の見易き所、將來、我が國民たるべき少年子弟をして、身躰健全なると同時に、此の如き技に熟せしむべきなり。然るに、

徒らに、其の兒童の生命に害あらんことのみを恐れて、全く、游泳を禁ずるが如きは、不注意の甚しきものなり。

●帝國艦艇の類別　帝國海軍に屬する艦艇の類別は、左の如く改定せらる。

帝國艦艇類別標準

艦種	等級	計畫排水量
戰艦	一等	一萬噸以上
	二等	一萬噸未滿
巡洋艦	一等	七千噸以上
	二等	七千噸以下三千五百噸以上
	三等	三千噸未滿
海防艦	一等	巡洋艦ニ仝ジ
	二等	
	三等	
砲艦	一等	千噸以上
	二等	千噸未滿
水雷艇	一等	百二十噸以上
	二等	百廿噸未滿七十噸以上
	三等	七十噸未滿二十噸以上
	四等	二十噸以上

右標準に基きて、各艦を類別すれば、左の如し。

軍艦

戰艦（八隻）

一等　富士、八島、敷島、朝日、初瀨、三笠、（六隻）

二等　扶桑號、鎭遠號、（二隻）

巡洋艦（二十隻）

一等（裝甲）淺間、常盤、八雲、吾妻、磐手、出雲、（六隻）

二等　高砂、笠置、千歲、吉野、浪速、高千穗、嚴島、松島、橋立、（九隻）

三等　秋津洲、須磨、明石、千代田、和泉、（五隻）

海防艦（十隻）

現在海防艦には一二等なし

三等　比叡、金剛、高雄、武藏、葛城、大和、天龍、海門、筑波、濟遠、

砲艦（十五隻）

一等　筑紫、平遠、（二隻）

二等　愛宕、赤城、大島、鳥海、摩耶、天城、操江、鎭東、鎭西、鎭南、鎭北、鎭中、鎭邊、（十三隻）

通報艦（四隻）

千早、宮古、八重山、龍田、

水雷母艦（一隻）

豐橋

水雷驅逐艦（十隻）

東雲、薄雲、陽炎、夕霧、不知火、（五隻）

雷、電、颶、曙、漣、（五隻）

以上總計七十艦（內軍艦十七隻驅逐艦十二隻水雷母艦一隻）

水雷艇

一等（百廿噸）小鷹、鵠龍、隼、白龍、鵲、眞鶴、千鳥、（七隻）

二等　第廿一號乃至第廿五號、第廿九號乃至第四十九號、第六十號乃至第六十六號、三十一隻

三等　第五號乃至二十號、廿七號五十號乃至五十九號、廿七隻

四等　廿八號及び艦船に搭載せるもの若干隻あり

●夏期料理講習會　三土節子といへる人、地方女教師等の爲め特に、料理法の夏期講習會を企て成女學校の職員之を賛し去月下旬、同校に發會式を舉げしより、日々午前九時より講習せるが、其の方法は、頗る整頓し、講師は、赤堀峯翁同峯吉兩氏にして、講習の前、先づ、當日の獻立を示し講師之が調理を說明し、然るのち、當日指定して、左の諸役に從事せしむ。

亭主一人〇書記一人〇木板一人脇板一人　助手一人　〇本鍋一人脇鍋一人〇助手人　蒸方一人　〇燒方二人〇洗方二人〇摺方一人〇立國一人等

此は、講習滿期までは、料理饗應全体に通ずる趣向にして、夏期卅五回が、滿期なれば、素より、概畧に過ぎざるべきも、大体には通じ得べく、滿期には、本膳會席迄にわたる豫期なり。さて、去月二十五日は、左の獻立なりきといふ。

皿　鰹鹽燒同酢蒸山かけ龜甲唐爪木目かん新生姜▲椀　豆腐うす葛卸生姜▲うま煮硝倦　海老新芋亂切牛旁細いんげん抽干

右の如くにして、九時よりかゝり十一時に亭主指圖して飯を炊かせ、膳立の用意をさせ、十二時調理了り、盛りて、一同食膳に就きたり。當日給仕擔任者は、後にて食に就けり。偖、器皿等は、一切、各自一揃づゝ携帶し、各自食後に之を洗ふなり。食費は、日々二十錢內外を度とすと。又、別

科に、洋食調理を望むものありて、其の講習をも開きたり。器什は、可成、日本在來のものにて、問に合はず積なりといふ

●蠶業講習所の成績　西ヶ原の同講習所は、既に、夏蠶を終了し、即今、秋蠶に着手せり。又、同所に於いて、例年收穫する繭は、數十石の多きに及ぶも、試驗用に少許を殘し、入札拂になし來りしが、年一年同所の擴張を謀る爲め、本年は、之を賣却する筈なりと。又、蠶種は、全國當業者の志願に依りて、小石丸、角又、青熟の三種(合計二千枚の收獲ありしと)を、本月中旬より、無代價にて、全國へ配與すと云ふ。

●少年父を慕うて出京す　親の心子知らずとは、ふるくより、いひならはしたることなれど、あはれ、此の兒、賴む蔭なき孤兒同樣の不幸に彷徨ひ、父戀しとのみ慕ふ心を親なる人の、知るや否や。靜岡縣大黑村馬淵百二十番地の農、和田卯五郎長男彥吉(十一)と云ふは、昨年中父卯五郎が活計の都合によりて、府下八王子邊へ出稼ぎに來りし跡は、母と共に、自宅にありて、只管、父の歸國を待ち居たれど、其の後は何としてか、更に、音信のなきより、今は、糊口にも差支へ、母も、遂には、愛想を盡して是は、また、薄情にも、彥吉一人を殘し置き、何處へか姿を隱したるに、彥吉は、兩親に振捨てられ、小兒心に、いとど悲しく、泣き暮らしゝも詮方なく、遠縁の親戚方へ引取られて、辛抱し居りたるが、遂に、父を慕ふの餘り、先頃、獨り靜岡發の汽車に乘りて出京し、新橋停車場へ着したれど、西も東も判らばこそ。唯、迂路々々と迷ひ居たるを、警官認めて尋問せしに、前記の次第を述べたれば、一應芝署へ連來り、目下八王子へ向け照會中なりと云ふ。

敎の庭



八月廿日兼題　船納涼

地　鹿兒島市山下町　丹下花子

夕つきのかゝるやなぎのしたかげに
　なつをよそなるよどのかはふね

人　仙臺市國分町　永井廣子

つき見つゝ淸きなかれにふねうけて
　すゞみする夜はなつともなし

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

ゆふかせに梶をまかせてひるの間の
　あつさをなかすなみのうへかな

秀逸四首

なつ川に小ふねうかへてさをさせは
　そこひよりこそあきは立ちけれ　甲府　名取正代子

さをさゝば月もくだけんたまかはの
　すゞしきかぜにふねをまかせて　香川　有信屋須子

さゝ浪のよするおきのみすゞしくて
　かぜもおもはぬふねのうちかな　筑前　小田させ子

さすさをのしづくもいさゞ涼しげに
　なつをわすれてゆくすみたがは　本所　和田きく子

（以下原稿到着順）

さゞ波に身をさへあらふこゝちして
　いよゝすゞしきふねのうへかな　友永章子

川かぜのふかぬひまさへすゞしきは
　ふねにあきをやのせてきぬらん　那須邑子

川きしにふねさしよせてゆふすゞみ
　なつにしられぬかぜかよふなり　中山常子

ゆふ月のかげをのせゆくすみ田がは
　さをさすふねはすゞしかりけり　黒田明子

よど川のきしのやなぎにふねとめて
　まつまにいづるつきぞすゞしき　黒田美津子

はま松のかげにしばらくふねよせて
　つみてかへらんなつわすれくさ　松橋輝子

風やどるやなぎのかげにさをさせば
　あきもやふねにのらんさしらん　虎口資子

月のさすかは瀬のなみにまかせつゝ
　なつをながせるふねのうへかな　下田鶴子

舟のかぜわかたもとにもつゝまれて
　なつにしられぬすゞみなりけり　輕部壽子

掉させはつきもろともにながるなり
　なつしらかはのせきもさゝめす　竹村竹里子

行まゝにふねをながしてすみたかは
かへるはをしとくちのまに〳〵　佐藤保子

月きよみかものかはせのゆふすゞみ
なつをわするゝふねのうちかな　山田稲子

あつき日もけふはわすれてすみた川
さほさすふねのうちのすゝしさ　羽田三緒子

すみたかはさほさす舟にてるつきの
ちゝにくたくるかけのすゝしさ　千代田たき子

おもふどち流るゝみつにさをさして
けふもあつさをかきながしけり　鵜原菫子

隅田がはたなゝし小ふねさをさして
すゞむいふべはなつなかりけり　富田とも子

川ぞひのやなぎのしたにふねとめて
すゞみする夜はなつとしもなし　頴川ちか子

月もすみながれもきよしすみたかは
ふねこきよせてゆふすゞみせん　萩原章子

ゆく水もすみだのかはをこぎゆけば
あつさはよそにながれぬるかな　高橋天留子

おもふどち小舟うかべてすみたかは
くだすかは瀬はなつとしもなし　西川順子

日陰おほふしま松かねにふねよせて
なつなきくにとおもひけるかな　中澤千野子

涼しさにこのよのほかのこゝちせり
はちすのはなにさをとゞめて　椎野ぬき子

日をさふるやなぎのかけのつり舟は
こゝろもともにつながれにけれ　椎野秀子

棹とめてつきかげうつすかはみつを
むすふたもとにあきかよふらん　椎野清子

てにむすふみつにも月のかけみねて
かたへあきなる宇治のかはふね　推野薇子

つきかけのみつにくだけてすみた川
さほさすそでのすゝしかりけり　椎野鋭子

なつころもたつ田の川にさをさせば
すゞしくすめるゆふづきのかげ　根田よし子

なみたゝぬ川面のふねをやどりにて
たもとすゞしきなつのゆふぐれ　稲見きよ子

月をのせながれにまかすすゝみふね
なつのありかやたつねわふらむ　小笠原元子

三日つきもほのめきいでゝすみた川
ながれにまかすふねのすゝしさ　片山常子

かぜかよふをかざき川にふねうけて
あつさをよそにすゝむ夜半かな　原敬子

ながれゆく水のおとだにすゞしきを
つきもすみたのかはなみの上は　澁谷きそ子

ながれゆく水さへあるをおもふどち
ふねにしあればつきもすみけり　中川あきつほ子

さゝ波のよするきしべにふねよせて
いやにすゞしきまつのしたかけ　遠藤旬子

おもふどちすゞみがてらに舟うけて
つりするそでにあきぞかよへる　榎本きぬ子

棹さしてうかむをぶねのすゝしさに
なつもしられぬこゝちしそすれ　木村きよ子

おもふどち波のまに〳〵こぎいでゝ
あそぶゆふべぞなつなかりける　丸木靜江子

思ふどちふねをうかへておきつかせ
すゞしくのほるつきを見るかな　石川類子

うきふねにのりつゝうきを忘るまで
ふくかせすゞしなつのゆふくれ　石川樂子

あゆはしるながらの川のすゞみぶね
すゞしきかぜのよりさころなる　石川南江子

あまの子さこゝろやすくも釣たれて
けふもひねもすふねにあそびつ　石川久子

春ははななつはすゞみのすみ田がは
ゆきかふふねのにぎはしきかな　室地つる子

船のひもいつしかきねてすゞかせに
かりねさむれは夜はふけにけり　古賀龍子

棹のしづくかゝらぬ袖もさながらに
あきをおほゆるふなすゞみかな　篠田圓子

身をかへしこゝちするかな舟うけて
ゆふかはの邊にすゞみけるまは　諸井くら子

夏の日のあつさをなかすかはみづに
うかへてあそぶふねのすゞしさ　鈴木かれ子

水なれ棹さすかたもなきふねの中は
ひさへにすゞしなつのころもて　岸山あや子

夏ころも日もゆふかぜにふねうけて
やましたかげはすゞしかりけり　川村こふ子

水無月のそらもなみぢもうきふねも
なかろゝさ見ろかげぞすゞしき　宮田けい子

もしほ草かりつゝかへるあまの子の
ふなぢはなつもすゞしかるらん　綾脇ます子

立田がはきしの木かげにふねさめて
そよ吹くかぜにあきを知りけり　菊地英代子

ふねさめてしはし涼まむ絶ねまなく
かはかぜかよふなつのゆふくれ　前川季子

すゞしさはなにゝたさへん川つらに
小ふねうかへてあそふゆふへは　田代綾子

さをさせはこゝろまでこそすみた川
はれたるつきにかせもかよひて　田代艶子

行くみづに夏をなかしてつきかげさ
さもにうかべるすゞみふねかな　深尾千代乃子

ゆふすゞみきしをはなれて行く舟は
あきをのせたるこゝちこそすれ　土谷新子

行く水にあつさながれてすみ田かは
たもさすゞしきふねのうちかな　千石素子

川かぜのおさしづかなるなみの上に
うきてたのしきふなすゞみかな　根岸登英子

いそやまの涼しきかたにふねさめよ
なみのみがけるつきをしも見ん　佐野幾代子

涼しさをほたるにこゝろさそはれて
かへさわするゝふなあそびかな　佐久間正子

すゞしくもつきのひかりはすみ田川
ふねにはさほもさゝれさりけり　松田春枝子

川かせの吹きのまに〳〵ふねうけて
すゞむゆふへはなつなかりけり　日高かす子

こくふねの棹のしづくにぬれてふく
かはかぜすゞしなつのゆふくれ　河野みち子

ゆふされはいさ棹さりてふねはてん
すゞしきつきのさすにまかせて　藤井りゑ子

つきあかきすみだがはらのゆふ風を
のせつゝかへるふれのうちかな　中島なみ子

すみ田川きよきながれにさほさせは
つきものりきてすゝしかりけり　寺村きよみ子

思ふどちすみたかはらにさをさして
涼むによひはふけすらあらなむ　國田柳子

船うけてあそふかは瀬のすゞしさを
なかれにうつすさもし火のかけ　東郷常子

船居してつき待つよひのたまくらに
うたゝすゞしきゆめを見すらん　佐藤幸子

すみ田川きよきながれにふれうけて
こぐもすゞしき今よひなるかな　江尻千代子

夕くれにあつさをはらふやかたぶれ
こきゆくまゝにかせぞすゝしき　村田いさ子

暮ぬまにふれこきよせよみなさ江の
ゆふかぜすゞしなみのおさかな　藤倉ゐい子

てるつきはなつさしもなし隅田かは
をふれうかへてすゝむたのしさ　上村ちさ子

こきいてしよさの川瀬のすゝみふれ
いへちわするゝこゝちこそすれ　上村英子

岩ふちのつきのこほりにふれさめて
ひむろなられさなつをわすれん　大橋銀子

うら風にまかしゝふれのすゝしさは
ゆめにもなつをしらぬなるらん　森田さく子

舟の中にかよふかはかせみにしみて
なつのほかなるこゝちこそすれ　大橋美代子

舟やれはいさゞすゝしもこゝろさへ　岡本松野子

うきてながるゝみつのうへかな

さしくたす舟にはなつもなかりけり
あつさもいまはのりおくれけん　岡本菊乃子

ひさかたのかつらの河にさしくたす
つきのみふれのゆふすゝみかな　岡本左多子

吹くかせにたゝよふ船のすゝしさは
いかなるなつのすきまなるらん　加藤愛子

夕日かげきよきながれのふなすゞみ
なつさもわかぬこゝちこそすれ　服部倫子

こぎわたる棹のしづくになつころも
ぬれてすゞしきふれあそびかな　仁保基子

夕かぜをひさつにのせてこぐふれは
ひるのあつさもながれけるかな　德永萬壽子

さゞ波にかげもくだけてこぐふれさ
さもにながるゝつきのすゞしさ　山代由子

あしきたの野さかの浦のゆふなぎに
水しまにかよふゝれのすゞしさ　佐々小琴子

船つなぐやなぎがもさのゆふすゞみ
かぜこそ今日のあるじなりけり　佐々有鄰子

夕つきのかげもなみまにうかび出て
なつをよそなるふれのうへかな　坂本遊多歌子

やなぎ葉のちりくる船のすゞしさは
さらへなつさおもはざりけり　溝口貞子

すゝみ舟なつしらなみのすみた川に
あた葉をわけてこぐぞたのしき　榎本照子

ふく風のふれにもあまるすゝしさに
うかれてあそぶなつのかはつら　長澤家子

ゆく水にすゝしささめてゆふかぜも
月もこゝろにまかせてそこぐ　青木たま子

すみた川きよきなかれにふれうけて
すゝむいふへそたのしかりける　磯野こさ子

みづきよき淀のかは瀬にさをさして
のぼるゆふべはすゞしかりけり　松尾せい子

よもすがらすゞみがてらに舟うけて
かは瀬こぐ間はなつなかりけり　松尾富美子

かせわたるすみ田川原にふれうけて
すゝむゆふへはなつなかりけり　山田障子

すみた川なみのまに〱ふれうけて
すゝむもたのしなつのゆふくれ　渡邊龍子

吹く風さきよきなかれに任せおきて
なつをよそなるふなすゝみかな　竹下すね子

夕まぐれすみだのかはにさをさせば
ひるのあつさもながれつるかな　清菅せつ子

棹さしてゆくなつかはの舟のうちに
つきものせたるゆふすゝみかな　中村さく子

すみのねのなつわすれ貝これならむ
をふれにあまるまつのゆふかせ　加藤㘴子

ずみた川をふれうかぶるゆふなみに
つきもすゞしさかげひたすらむ　服部嵐子

なつ川のやなぎのかげにふれさめて
むすふゆふべはゆめもすゞしき　服部正子

いせかよふまつかげよりもゆふ川に
うかぶるふれのうへぞすゞしき　鍋田龍子

すゞしきははなひるまでの川かぜに　河合縫子

風わたるゆふかはなみにさをさして
なつをわするゝふれのうらかな　三宅中枝子

くれはてゝつきもすみたのかは舟に
なつをはなるゝふれのうちかな　長澤ひで子

すまのうらかせのまに〱棹させは
うかれてしはしなつそわするゝ　三井しづね子

みそら行く月のかけさへすゞしきを
ひるまのあつさわすられにけり　大谷津峯子

かぜわたるよさの川瀬にふれうけて
なつをわするゝふれのうへかな　佐野鶴子

ゆふなきにすゝみの小舟こきいてゝ
すゝしくあそふなつのゆふくれ　阪本榮子

月みつゝすゝみ小ふれをこぐ夜半は
つきまつしまにあそふたのしさ　黒野よし

立ち歸るこゝちこそせれふれの上は
あきにのりたるこゝちこそすれ　神村たか子

月かげのやさる小かはにさをさして
またきにあきのはつかぜそふく　森このゑ子

つきもよしなかれもきよしすみだ川
しはしはなつをわすれけるかな　松本やす子

かはそひのやなきの糸につなかれて
ふれのうへにはなつなかりけり　石川れん子

てる月のかけもうつりてかもかはの
よる〱すゝむふれもありけり　蔚石登代子

かはせすゞしきふれのうちかな

八月廿日兼題

歸省中同窓の友に送る文

天　但馬國石出町　西川順子

露けき袂分ち參らせしより、はや、一週日を經過致候。御許樣には、なさけ深き父母の君、愛らしき同胞の君たちに迎へられ、螢雪の勞をもしむし忘れれて、夕べ冷しき遣水の邊に、樂しくまとゐし玉ふらんと、床しう思ひ參らせ候。妾も、去にし五日、懷かしき故郷には歸り着きしものから、今年は、去歲の如く、暖かき手に迎へらるゝ母のゐまさぬのみか、同胞も、皆他鄉に出でゝ、家には、年老いし、父の、淋しく、しかも、まちかねしさまに迎へらるゝが、まづ、涙にて候ひき。去歲は、共に愛でし花うばらの、色香變らず前栽に咲き出でしを手折りて、母のおくつきとぶらひしに、後に聳ゆる有子の山も、前に流るゝ圓山川も、無言の間に、幼時の歷史を語るが如くおぼゆられ、いよゝ懷舊の涙に袖をしぼり申候。常に、師の君より、家庭の和樂といふ事に付て、懇なるみさとしをうけ候ひしを、なほざりに聞くとにはあらねど、さばかりとも思はで、打過ぎ候ひし事の、今更、口惜しく、此の度歸省して、家庭の樂の尊きを、深く味はひ申候。殊に、婦女の天職は、主に、家庭の趣味を高め、快樂を增し、家人をして、家庭を愛せしむるにあれば、この尊さを味はふと共に、かつて、いやしみし、裁縫、割烹、遊戲の類まで、研究の必要を感じ、この休暇を利用して、實地の稽古を爲さんと決心いたし候。君には、かねて御話の如く、植物の採集に、御着手遊ばされ候や。定めて、種々珍らしきもの、御あつめなされ候ふらんと、ひたすら、再會の期を、たのしみをり申候。尙ふたつ、みつ、心に感じたることども、しるし度候へ共、此の頃は、筆とる手の暇なく候に付き、惜しき筆とめ參らせ候。かしこ。

地　大阪市北區中ノ島六丁目一番屋敷　松尾ない子

秋ちかくなりぬれど、暑さは、三伏の夏にもまさりてなん。かぞいろの君たちにも、御事なう在すらんや。此許、恙なう過し侍るを、御心になかけ給ひそ、別れまゐらせて、未だ、十日あまりなれど、一年も相見ぬ心地し侍るかな。君が家路に着き給へる、わきて、妹君には、さこそよろこばせ給ひけん。こなたにも、幼けなき弟の、ものめ

づらしくてや、あけくれなづさふもうれしく、只、涼しき樹蔭にうち連れて、苦熱を凌ぎ居候。御住居のほど丶は事變り、かく都遠く、かごかなる草の屋とて、訪らふ人も罕に、見聞く事も少なけれど、自然なる谷蔭の清水は、心の塵を洗ひてなん。あはれ、中垣ゆはぬ友人ど、共にむすまば、いかに樂しからましと、はかりなき事を願ひて、いとゞ御なつかしう存上候。君には、いよ丶學の道にいそしみ給ひて、いうびかなる御心に、香はしき花、うるはしき玉の數々容れさせ給ふらん。御詠草の反古とも、示し給はらむや。なほ、申さまほしけれど、拙き筆にくだ／＼しきは、御暑けさを、添へまつらんと心苦しくて、かくばかり。あなかしこ。

人　羽前米澤市川井小路　遠藤旬子

一年の中に、いと丶たえがたきは、夏の暑と冬の寒とや承はり侍る。げに、寒さは凌くべき道もあれど、夏の苦しき暑さのみ、凌くべきすべのありともおぼえず候。君樣には、いかにしてか、此の頃の暑さを過させ給ふ。學びのひまを得て、別れ別れに、故郷にかへりしは、昨日今日と思ひ侍べりしに、久々にての歸省とて、親類、あるひは、ふるき友垣のとひおとづれて忙はしく、十日あまりは、夢ゆめのまに打過ぎ、そよとの音信をも、申上ざりし事、平に、ゆるさせ給ひてよ。諸共に學びの庭に、つとめ居り候時だに、一日まみえ侍べらねば、いかにし給ひしぞ。おん病になど、おかされ給ひしにはあらざるやなど、胸安からず覺え候ひしを。まして、二十日近くも、相見ぬ中に侍べれば、いと丶なつかしうてなん。このごろは、日々弟妹を集め、讀書書取など致させ、師となり弟子となりて、ある時は山に、あるはのべになどゐて參り、むじやきなる人どもを相手に、誠に面白く、且つたのしく事ならくらし居り候まゝ、おん心安く思召給はり度候。申上度事海山侍れど、そは、上京の上、おんまのあたりに、きこえ奉るべしと、たのしみ居り候。おんひまもおはさば、おんわたりのおん有樣など、ちと／＼、おんもらさせ給ひてよかし。先は、御きげん伺ひまで。かくなん。

（以下原稿到着順）

寺本いし子

みやこにて、別れし、其の後は、たねて、御左右も、伺ひ待らす、御許し給ひてよ。黄金もさろかす、此の頃の暑さ、御許樣には、如何にて學びの道、いそしみ給ふらんさ、かげながらさつし

入候。妾事變る事なう、すごし候へ共、御地さは事替り、ゐなかの悲しさは、したしきさもごちも居まさず、又、師さあほぐ可き御方も居給はず。いさも、つれ〴〵にすごし居候。就ては、御地にて、御許様さ、いそしみ遊びし事、思ひ出でられ、本意なき事さ、かこちければ、母なる人のゝ言の葉に、すぐなる竹を師さあほぎ、くもりなき鏡を友さし、心は正しく身は清くさ、仰せられ候故、及ばぬながらも、その言の葉を守りいそしみ居候。きこゐあげたき事は、かず〳〵候へ共、餘は上京の上にさ殘し候。申までも御座なく候へ共、此の節は、あしき病氣の流行する時節に、御座候へば、御注意遊ばされ度、祈上奉り候。あなかしこ。

篠田園子

さても、已、故鄕へ立歸りてより、早、二十日ばかり、うちすぎ侍れど、其の後、御許様には、別段御暑さの御障りも、おはさずや。此の地にてすら、昨今は、餘程凌ぎがたければ、うち日さす都の御住居は、さこそさ推しはかられ侍り。こゝもさにては、兩親を始め、外一同、至て、すこやかなれば、乍憚様、御心安め給ひてよ。さりながら、日々客人のみ多く、其の度ごさに、三年此方の物語り、致すなれば、中々にいそがはしく、其故、君にも音づれ致さゞりし罪、何卒、寛き御心に、ゆるし給へかし。兩親も、久ぶりの事さて、一日も長く、止まれよかし、などゝのたまひ給ふにぞ、こたびの上京は、多分來月に相成べくさ存候。斯く、かぞいろの君の、みそばに在りて、何くれさ、つかふまつるは、いさ嬉しけれど、さればさて、親しき友がきの、あまた、おはしますさ、思へば、又、都の方も、なつかしく、我身二ツ三ツありたらむには、さこそ嬉しからめなどゝ、思ふ事あるも、いさおかしう。さて、君に送くられて、都を立出てより、今日までの御話、かず〳〵あれど、さても、まはらぬ筆には、つくしがたければ、何れ後日、たいめ給はりし折に、萬々きこゐ上ぐべくなむ。まづは、御なつかしさの、あまり、御ぶさた御わびかたかた、みけしき御伺ひまで。あら〳〵かしこ。

榎本照子

天つ空に、あやしき雲のみひろごりて、照る日もいたうむし暑う、賴みに思ふ風さへも、絕ゐはてたる此の頃、御地には、御父母様始め、御妹子様には、替りなう、學びの道に御いそしみなされ候よし。御なじみの、たれ様よりの御申こしにより、心安う致し居候。げにや、めぐる月日の糸車、糸くる音をば耳にして、馴れにし故鄕を出でしより、はや、三年餘り。こゝに、やう〳〵、妾がつさめもすみぬれば、はや、今朝は花の都を後に見なし、皆々様に送られて、程なく鄕地につき申候。さらぬだに、故鄕の忍ばるゝを、學びの道に月日へて、むつみし友の御許様さ樂しみ苦しみ共にして、雪のまだきに起き出でゝ、はだへつらぬく寒風に、物習ひせし事もあり、互に、つさめはげみして、試みの數も重ねて、三年の前の三月には、年立つ學びの靑垣を出でしより。はる〳〵さあづまの都に上りしが、こひしきたらちねの君、したはしき學びの友、春の野山の色みどり、夏風凉しき川邊など、思ひ出ては、さり〳〵にたらちねの父母戀し事など、旅の話を物がたらん。さては、秋も間近になりぬれば、むつたま合へる、そもじ様たちさ、心もあかき紅葉を、かざしにさして遊ばまし、など今より待わび居り候。さかく心せられて、取いそぎ候まゝ、先は、かくなん。

深尾千代乃子

暑しあつしさは、年ごさのならひなれど、こそのあつさは、わきて、きびしう候を、御許様には、市中のちりをまけて、夏知らぬ御すまひゆゑ、いつも、ひろやかなる門田の面、あたりにさやぐ

松風の音など、御獻文の料おほく日ごとにすさびたまへるにや
と、いと〳〵うらやましうてなむ。わらはゝ知りたまふごとく所
せき町中のすまひにて、日の中は、命とたのむ風もたゆ、手に取
るわざさへものうく、ほと〳〵こうじ居候。あはれと思して、み
景色のはしをも記るし惠みたはれかし。くれぐもおんゆるさせ
のほどねんじ上候。あなかしこ。

松田春枝子

てりつゝく此頃のあつさ、いとたへかたきに、梢になく蟬の聲さ
へかしましく、苦しさをそへて、なきわたさるをりから、君に
は、いかに過させ給ふらむ。定めて、こぞの如く、涼しき御別莊
にこもりおはすらんと、推しまゐらせて、いと〳〵うらやましう
なん。歸鄕後、とみに御氣色伺ひ奉るべかりしを、何かといそが
はしさに取まぎれて、今まで無音に打すぎはべりし段、ひとへに
ゆるし給ひてよ。妾こと此の夏は、例のいたつきも無之はべれ
ど、日頃のあつさ、ほと〳〵たへがたく、さながら、むさるゝが
ごとき心地せられて、如何なる前世のつみにてかあらんと悲しう
かこちつゞけつゝ、一日〳〵といたづらにのみ過しはべりしに、
げに、月日はながるゝ如しとか。互に袂をわかちし夏期休業も、最
早半ばをすぎはべりぬ。されば、程遠からずなつかしき君と膝を
まじへて、つもる物がたりをなしはべらんと思へば、いとゞうれ
しうて、ひたすらにこたびの上京をのみまちいそがれてなん。あ
たりには、學びの友の一人だにをらねば、いと淋しき心地せられ
て、つれ〴〵にのみくらしはべるを。あはれ、いまだにあらせ
給はゞ、何とか御水ぐきのあとを、手にむすばせたまへや。かへ
りことなど、むげにもこふにはあらねど。かしこ。

日高かず子

神戶より參らせし文見そなし給ひつらん。夫より一日おきて、や
う〳〵恙なう着き侍りぬ。日頃、なつかしう思ひ渡りし故鄕の
空、ふりはへて歸り來し今日こそ、いみしう東の方の眺めらるゝ
につけても、かの「賴むましきは」とよまれけん歌もおもはれて、
我ながら、おぞましとなむ。さて、御舘へものして、親御の君を
ばしめはらからたちに、めづらしう目見ねまつりぬ。よろこびき
こえたまひて、左右よりおほん事、都の樣など問ひ給はる。ねも
ころにきこえ上げ侍り。おほんかた〴〵つゝみなうおはし侍れ
ば、御心やすかるへう。父母ら、妾の歸りをよろこひて、老の心
つかひなう侍りぬ。こゝの、三年まへとはいたくかはりて、商工
の業進みて、土地の爲め、御國の爲、よろこはしき事のみそ多か
る。されど、今年は淸の國の亂れに、軍艦は、外つ國にも御國の
もひまなくいでいりて、おのつから、人の心も引たちぬるやうお
ほね侍るは、賴しきにや、むつかしきにや。暑は、去年にもまし
てなど人々いひはやせど、そは、年々の心柄にも侍らんかし。さ
はいへ、都に住みなれし身は、一きはまさりてあつさもおほね
れ侍り。玉の浦波がへす〳〵もしろさまほしき事は澤に侍れど、
來る二十五日には上りにつく心しらひなれは、よろつは學のまと
にてものせんと、ふみてさしおきつ。師の君、友達のおほんかた
がたにも、よろしなへにきこえ給はらまほしうなむ。あなかし
こ。

中島波子

いみじう、あつき此の頃、いかに、すぐさせ給ふらむ。去月の
半、もろともに、學びのかど。立いでゝ、西ひむがしに、袂を
分ち參らせしより、日々〳〵暑さ加り候ひぬ。露のさわらせ給
ふこともおはしまさず候や、私事、當地へ歸りつきて、すぐさ
ま、御知らせ申上べかりしを、事にまぎれ、いまだ、聞奉らざり
し罪、ゆるさせ給へや。さても、君には、すが〳〵しき、御舘の

うちに、あしたには、とく文机にむかひ給ひて美しき満や、かき給ふけむ。また、如何にうるはしき御歌や、よみいでらせ給ひけむ。涼しき夕、月明き夜、御手馴の、玉琴の音やいかに。繙き給ふ、古今の文集、いかばかり分け入り給ひにけむと、磯うつ波に、思ひ浮ひては、たゞ汗あゆるのみに候。鹽やく蜑の子のむれに立入りては、朝夕にし汐浴みするのみを、日[illegible]として、細手足、すべて、黒うなりつゝ、さりとも、暑には得堪ねで、遂には天笠人ともなりなむばかりにて候。學ひやに歸り面合さむ日、驚かせ給ふまじや。とかくする程に、はや殘る日數も、少ふなり候ひぬ。烈しき暑いとはせ給ひて、休暇後には、はや／＼歸り入らせ給へや。いづれか、先立ち候やらん。當地は、此の月末の日出立と定め居候。尙、この他のめつらしき風俗。物かたりぶりの、おかしさなど、よろづ、その折にこそ。あなかしこ。

岡田柳子

暑さ、いみじう、厳しく、なりもてゆき候を、君には、御恙もなう、暮させ給ふらんと、嬉しう存じ候。わらは事も、暑中休暇となり候てより、懐かしき、古郷に歸りて、戀しき、父母の傍に、睦まじきはらからと、ちり積りたる物語に、時をうつして、暮しゐ侍り。久しう、都に、年月を過し候ことゝて、飽きてかへる身ならねど、父母の笑顔に、むかへ玉ふは、今更に嬉けなう覺ゐ候。朝には、妹と共に、こゝかしこをありきては、すぎし昔を思ひ、夕べには、父母諸共、ほど近き、河邊に舟浮べ、或ははしゐに、打集ひて、若葉をもるゝ月かげに、思をのぶれば、妹の、家庭のたのしみとは、是ならむなどいふ。げに、嬉しさも樂しさも、此の上やあらざらむ。さはいへ、君には、先つ日、御避暑にとて、房州の海邊に趣かせ給ひしとか。さぞかし、妾にもまさる、樂しみや候はん。はてもなき、青海原の景、又はくすしき、山水のさまを、まのあたり、見給ふは、いかに床しう候ふらん。御秀詠も候はゞもらさせ給へや。いづれ、學のやにて、くさ／＼珍らしき御話ども承らばやと、今より樂しみ居候。先はみけしき、御伺ひまで、かくなん。かしこ。

佐々有鄰子

避暑分袂の後は、同窓をはなれて、吾郷に歸省なしつるに、此のころのあつさ、いかに朝夕の涼風を袂にやどしたまふらん。伺ひ奉るになん。妾が家は、小屋の伏庵にて、あつさは眞鐵をとらかすごとく、軒にすだく蟬聲は、耳かしましく、實に堪がたく覺ゐ侍りしに、門の戸に鈴ふりたてゝ、今日の新聞の號外をなげいれける。取手おそしと披見すれば、七月十四日の天津城陷落の戰報になもありける。聯合軍の苦戰のさま、おもひやられて。いさいさましく、さながら目のへまに見るがごとし。ことに、目さましきは。天津城の南門を、吾が兵の手により、綿火藥を以て破壞せし、宮地一等卒、水越二等卒、二人が火藥に火を點したる。ふるまひになもありける。錦地は、第五師團の管區なれば、御親族の各位にも、さだめし御出陣にあひなりしならん。日本兵の勇戰の景況を、御筆のついでに、しめしたまへ。あなかしこ。

輕部比佐野子

すぎつる、土用休みの初日、互に惜しき袂を別ちてよりは、心は、片時も、御傍をはなれ申さず、朝な、夕なに。御地の空を打ながめては、いとゞ御なつかしくのみくらしなり候。其の後、御前樣には、如何にすぎさせ給ふにや。明け暮れ、心に掛りながら、何くれと雜事に取まぎれ、御不沙汰に打過ぎし不禮の罪は、みゆるし給ひてよ。二に、妾事も、此の頃は無事に。あしからぬ日を送り居候はゝ、幸ひ休日の間は、例の海水よくへ、御出

かけくだされ度、二つなき友の御前さ、たがひに、くさ〴〵の御物語するを、何より嬉しく、今より樂み居候。拙なき筆をもかへりみず、先は、斯くのごさくに御座候。かしこ。

竹下すゐ子

風もなき木々の梢は、せみの聲のみさわがしくて、一しほの暑さを覺ゐ候。昨日今日、御許樣をはじめ、皆々樣、御さはりも之れ無く候や。伺ひ奉り候。次に、此かた、兩親をはじめ、私妹に至るまて、無事に暮居り候まゝ、御安心被下度候。扨、先日歸鄕の際には、暑さをもいさひ給はて、停車塲まで御送り下され候上、妹にさて、結構なる品下され、御厚志のほご、有がたく存じ候。瀛車中は、唯うれしさのみ、胸にみちて、多くの驛々をも、夢の間にすぎ申候。まごよちのぞき候へば、限りなき田畑は、皆青波を打ちよせて、すゞしさ云ひも知らず、漸々、村近く相成候て、我が山のほのかに見ゐ候時などば、去年の事さも思ひ出でて、心なき草木も、笑み以てむかふる樣におほゐ候。家につきしは、一時頃にや候ひけん。久々の歸鄕さて、兩親のよろこびは、更にも云はず、妹事、頂戴いたし候品、殊の外氣に入り、日々隣の子供等にほこり居り候。賤が山里にしあれば、都のにぎはしきに比しては、なか〳〵に淋しく、四方の景色何さなく、かなしき樣に思はれ候ご共、兩親の許につかふる事はうれしくて、長き日も、積る都の物語などに、暮し居り候。此の寫眞は、近村に名高き瀧をうつし候物にて、左程大きくも候はれざ、あたりの景色すぐれたれば、一葉御目にかけ申候。尙、九月の初めにも、相成り候て、たのしき文の木かげに、同窓の方々さ、袂つらぬる折にもなり候はゞ、何かめづらしき物語して、おごろかし申さんに。たのしみて待ち給へや。

中村さく子

こん秋を、ちぎりつゝ、惜しき袂を、分ちしは、昨日の心地せらるゝに、夏の休みも、早、半近く成侍りぬ。其の後、御わたりには、いよ〳〵御うるはしう、渡らせ給ふや。うけたまはらまほしうなむ。御地は、定めし、例年の通、夏まつりにて、さぞ〳〵にぎはしからんさ存じ侍り。妾も、道すがら、事なう歸省致し、かはりなく、學びやの事ども、くりかへし、居侍れば、御心やすく、思し賜はりてよ。當地も本年は、あしき病などなく、靜にて、暑さも、都程には、侍らず、文よむにはよくかなへ侍れば、避暑がてら、御令妹樣、御つれまし、御車よせ、給はゞ如何に。あなかしこ。

丹下花子

出達の折は、何事も物くるはしきまでにて、いかにみそなはし給ひけんさ、今更、恥かしくぞおほゆる。瀛車は、其の朝六時に、新橋を出てぬ。二歲もみぬ故鄕のなつかしさに、瀛車の早さも、なほ、もさかし入なん。時の間にうつりかはる景色の、樣々な思ひつゝくるにも、思ひは、ひさへに故鄕の空にあくがるゝぞわりなき。二十三日、大阪さいふにいさうれしう、まづ、瀛車をおり、こゝよりは船にのる。二日の間、海路にて暮す。打續き晴れたる大空に、風いさ涼しう、故鄕へも近うなりぬさ思へは、自から、心勇まれて、佐多の岬よ、鹿兒島の入江よなど人々のわきたつるに、妾も、また、今更のやうになつかしさのいやましぬ。册はらからにはうち連れ磯邊にゐ給ひ、さくより待ちゐつるよさて、かたみによろこひいひかはすも、限りなきうれしさになん。ここに暫しみさるまに、妹のおさなひつることさよ。初めは恥らひたるさまに、やがて、妾の手をさりて、こちへさ家路をさすもおかし。あく家には、父にも兄にもいさにこやかにて、妾を待ちゐ給ふ。あくる日よりは、聞きつたへたる友達、たれかれ日々にさひきて、何

かさきひつ、かたりつ、かたみにへたてなき心に日を重ぬるも、樂みの内の樂みになん。さても、物事の進みゆくは、都のみかは。こゝにもありけるよ。過きし頃より、特に女の爲にさて設けつる學校の。日々に盛になりもてゆき、今は、賤の女までも、何くれと學ひの業にいそしむそうれしき。一日二日もせは、父さ、さる海邊に暑さをさけむに、或時は、汐汲む海士の少女に立ましりて、あはれ松風の流を汲み、また、澄みゆく月に心をやるもよからめ。或時は、沖つ白波立たぬ世に、いよゝ守る女の道など思ひつゝけんこそ、こは都には得かたき樂みならんかし。君には、今歳心つよくも都にとまり給へは、さそや、故郷のしのはれ給はんさ。志したまふ業のためには、いかで、むげに心なよわめ給ふ君ならじとは、妾の推しまつるところになん。何事も。そなたへまゐりし折。くはしう申のべん。必らず暑さになり身をそこなひ給ひそ。あなかしこ。



明治卅三年度女鑑歌文月次兼題

九月五日　歌　旅立つ人をおくる
　　　　　文　わが地のうるはしき風俗
右八月廿三日〆切

九月廿日　歌　涼風
　　　　　文　陰德
右九月七日〆切

十月五日　歌　霧中露
　　　　　文　秋夜の感
右九月廿二日〆切

十月廿日　歌　山初雪
　　　　　文　新刊書籍を贈るに添ふる文
右十月七日〆切

錦織竹香女史新著

普通 家事教科書

大和綴和裝全壹冊　定價三拾五錢　郵税金六錢

製本出來

本書は新式裁縫の教授を以て有名なる錦織先生の著にして、多年の經驗と幾多學理的の講究とにより、衣食住の三要點を始め日常心得べき必須の事項を簡潔に説述せるものなり、故に普く一般賢妻良母淑女たらん人の一讀せざるべからず

家庭用書

● 普通 裁縫教授書　和製全二冊　定價四拾五錢　郵税金八錢

● 新式 普通裁縫教授術　和製全一冊　定價三拾五錢　郵税金六錢

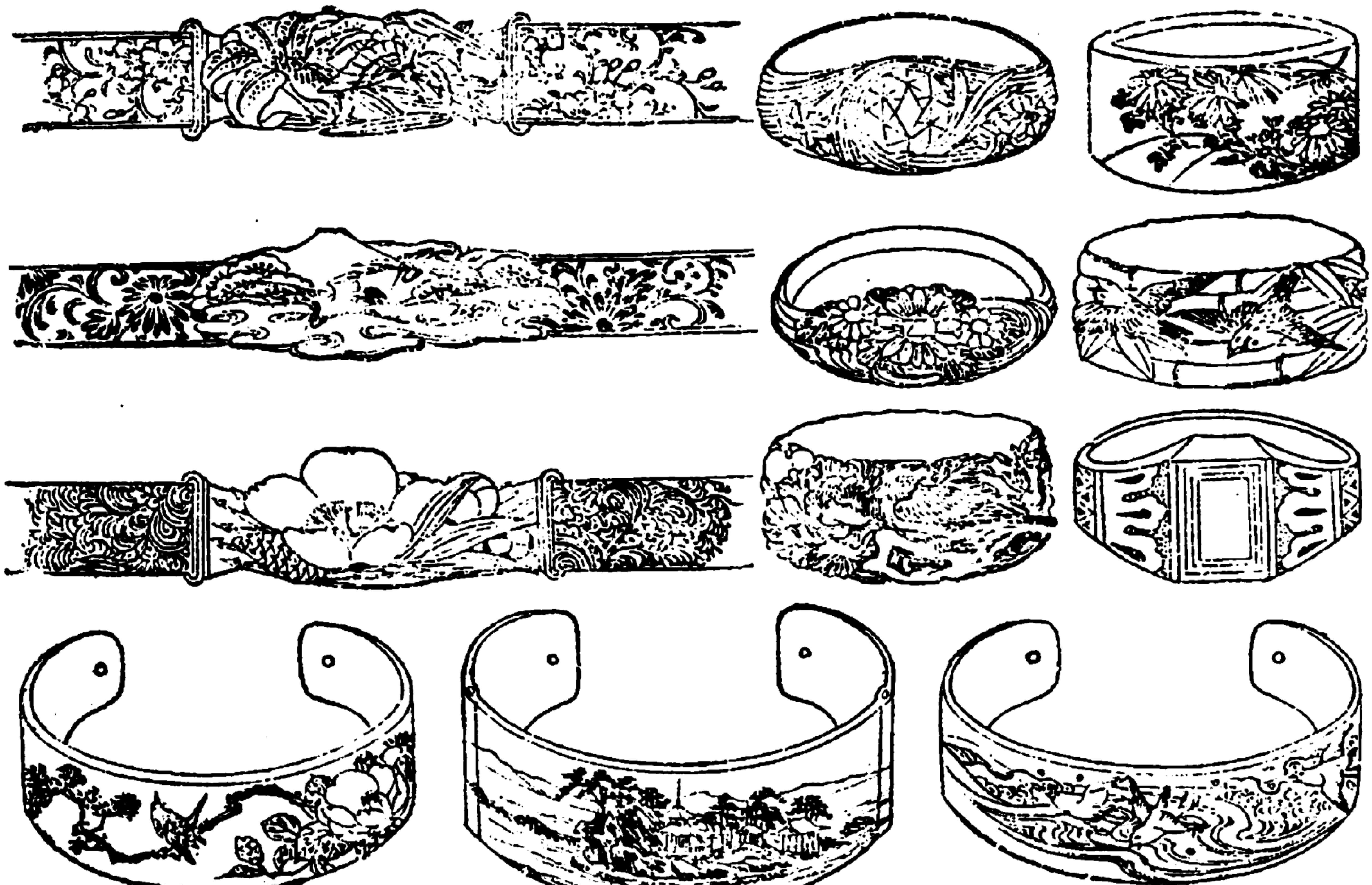
● 高崎正風大人題歌　税所敦子女史序文　下田歌子女史述　家庭要訓　四版發賣　大和綴全一冊　定價貳拾錢　郵税金四錢

發兌元　同文館

（東京市神田區表神保町二番地）

（關西販賣　大阪備後町　吉岡）

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價 十六圓
乙價 十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模様付形状ノ離易ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫縹珍綾織紐付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片切彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻 應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品々あり

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

吉沼又右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續

社告　女鑑毎月五日、廿日、發行

定價		
一冊		拾錢
六冊	（三ヶ月分）	五拾五錢
十二冊	（半年分）	壹圓
送料		全國無遞

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割増

領收　別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」○會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納料の來書は一切受取らず

廣告料
一行（五號活字廿三字詰）　金二拾五錢
半頁（二行三十詰）　金六圓
一頁（二段六十行）　金拾圓
料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年八月十九日印刷
明治三十三年八月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木頁雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●仝眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價參拾圓

（二）ダイヤモンド入甲價參拾圓●乙價貳百八拾圓

（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓

（四）ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

（五）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●仝ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

（六）ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●仝

（七）ルビー及サッノアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

（八）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓
眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外郵送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ装嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ河條ハ歷々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

妙技一等牌賞



天賞堂

東京神田小川町（電話本局二一六〇）
天賞堂小川町出張所

橫濱尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂橫濱出張所

大阪心齋橋北詰（電話東七三三）
天賞堂大阪出張所

名古屋市玉屋町二丁目
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市上鍜冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市今鍜冶屋町四十番地
天賞堂長崎出張所

福岡市橋口町榮屋方
天賞堂福岡臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷）